

4F学内

芸祭

1973

# 東京芸術大学芸術祭

9 / 28 ・ 29 ・ 30



## 48年度 芸術祭にあたって

学長 福井直俊

今年度の芸術祭は、私が学長に就任してから4回目に当る。この間、芸術祭の在り方について、それが“如何にあるべきか”ということを考えるように、毎年提唱してきた。

私は芸術祭は2つの柱から成り立っていると考えている。一つは、年に一度のお祭りの要素、他の一つは、平素の研修の成果を学の内外に示し、異なった立場の多くの人達と、芸術について語り合う場を持つという要素である。

芸術大学という一つのキャンパスの中で学業に勵んでいても、学部が違えばその事情が判らないものだし、また、同一学部内にあっても、科が違えば交流も少ないものであると思う。これは芸術大学が各科に分かれて、特定の技法を教授している以上避けがたいことであらう。

年に一度芸術祭を開くのは、全学を開放してキャンパス内の交流を図り、おたがいの事情を理解しあうと共に、異なった専攻分野の人達が、各自の進む途について心から話し合い、また一方、学外の人達にも、芸術に熱情を燃している様子を見て頂くためではなかろうか。

本年の芸術祭は特にテーマを定めなかったと聞いている。大上段にふりかざさない地味なときにこそ、かねてのべてきた芸術祭の在り方を、明確に現わすような催しになって欲しいものである。芸術祭執行委員の諸君の半数は、昨年度の委員が残留して事に当たってくれているとのことであるが、本年度の委員諸君も、昨年のように、お祭りと展示を分離するという本来の姿に戻すことに成功したように、これに劣らず、更に花をそえた理想的な姿にし、上野の杜で共に学んだという連帯感が、にじみでるような、みんなの芸術祭になることを希ってやみません。



# 1973/9/28-29-30



暑苦しく長い夏も過ぎ、「芸術の秋」がやって来ました。今年も9月の末の3日間、私達東京芸大の芸術祭が行なわれます。

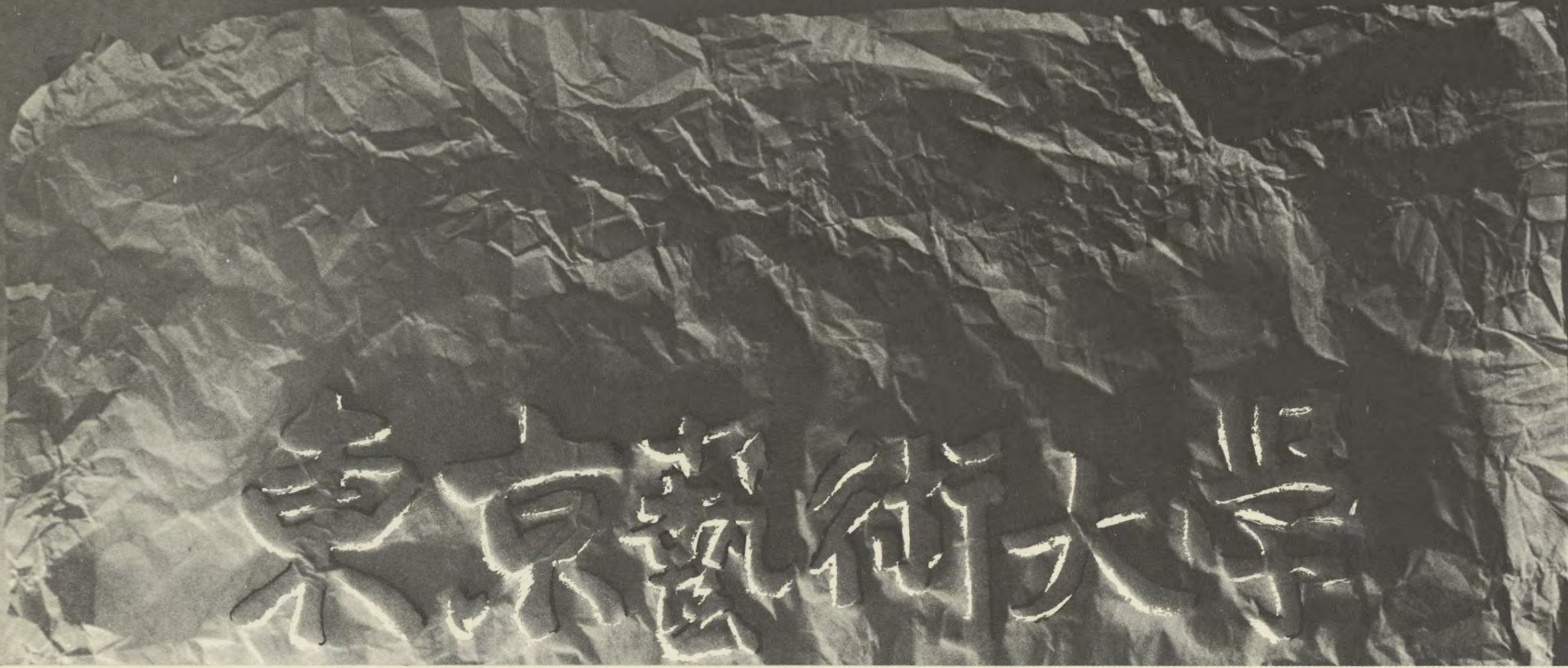
芸術祭が私達芸大生の日頃の創造活動の成果を世に問う場であり、同時にありのままの芸大生の姿を知ってもらう場でもあることを私達はめざしています。芸術祭が、見せる人きかせる人にとっても、見る人きく人にとっても、芸術とは、生きることとは何かということを考えるきっかけになればと思います。

3日間、というのは本当に短い期間です。必ずしも最善の状態ですべてを行なうことはできないかも知れないし、終わってしまえばまことにはかないものかも知れない、でもお祭りは楽しむものです。終わったあとに、何かが残るような、そんなお祭りにしてゆきたいと思います。

最後に、芸術祭を成功させるために努力して下さった方々に、お礼を申し上げます。

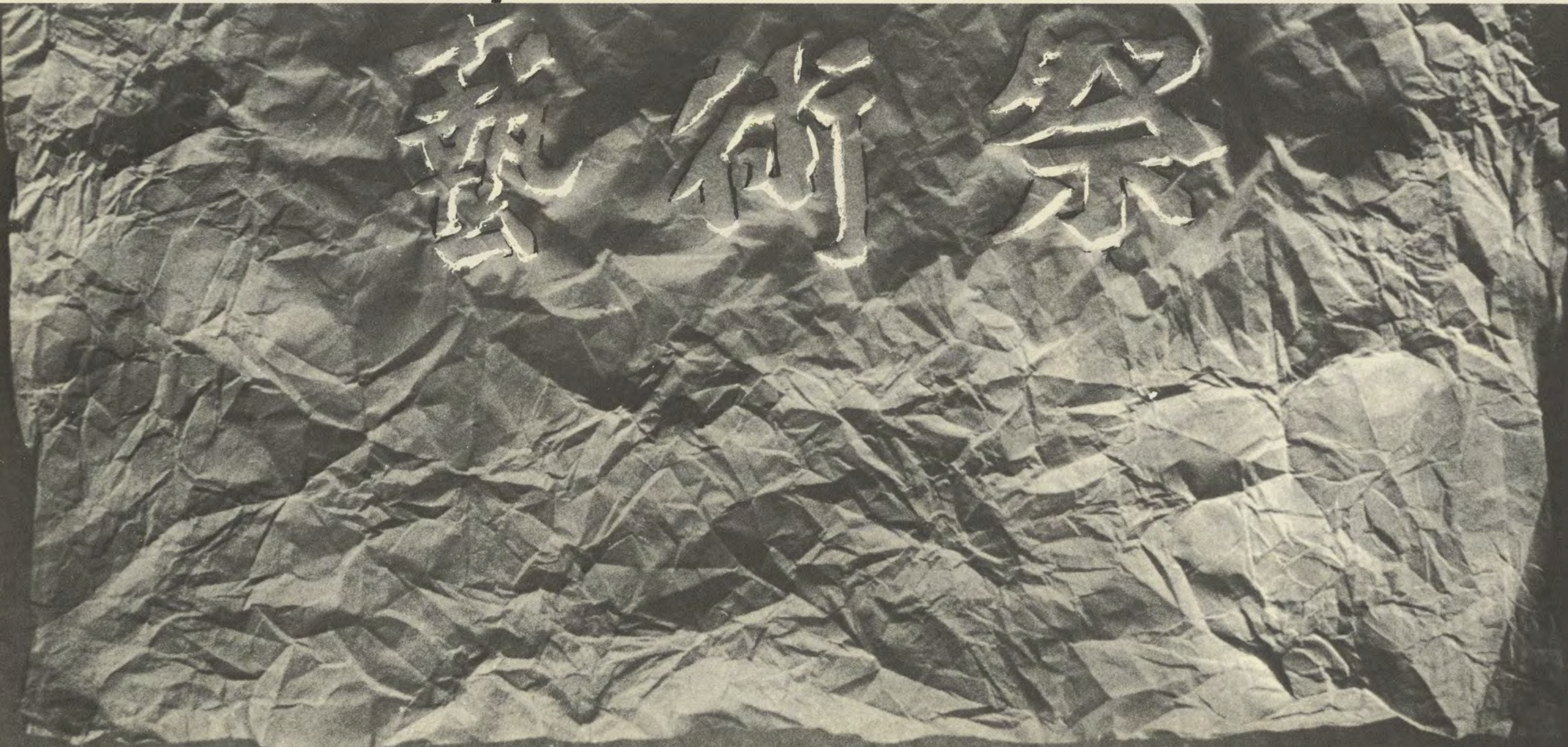
’73年度芸術祭企画委員長 山県敬子





東京藝術大学

**ART FAIR, TOKYO UNIV. OF ARTS**



藝術祭





## ■油画科

プラス、マイナス、カケル、ワル  
殺されるより、殺しはしないかと

何度も躓いて、躓いて、やっとつかまえた「場所」  
はかえって前にもまして宙ぶらりんな「場所」であり  
ました。

朝、あいさつした教授の後ろ姿のかっこよさに憧憬  
を感じたり、  
絵画塔のエレベーターの音が吸り泣いている声に聞こ  
えたり、  
昨夜見たラブ・ストーリーのアンチ・クライマックス  
に苛だちを感じたり、

レジェのオプティミズムより、ビュフェのベシミティ  
ックな倫理に、

福永武彦より山本周五郎に、  
加賀まり子より、浅田美代子に、  
ウイスキーより日本酒に、  
私たちは心をうばわれました。

中村秀太郎君の死。

現、何かを私たちはつかまえかけています。

プラス、マイナス、カケル、ワル  
殺されるより、殺しはしないかと



## ■日本画科

前年のプログラムでは、私が如何にして日本画に目  
を見開かれたかということ述べたのですが、今年は  
日本画にある数多くの高峰、名峰を前に如何に私が苦  
闘しているか、その戦況報告を致したいと、こう考え



## 美術学部

るわけですが、(ここまで書いてきて割り当ての行数を  
知らされる。)舌足らずの報告では読者も不満でしょう  
し、私も不満ですので折あらば酒席でじっくりと私の  
「戦況報告」を聞いて戴くことを約束して(行数は下に  
カリキュラムなんぞをのせ誤魔化して)今日の日はさ  
ようなら、さようなら。

カリキュラム

●1時間目(10:00~)

【体操】・早朝ランニング“ハイ、ボクキテマス”  
訓示「将来日本画に入学を志す者は毎朝のこのきびし  
いトレーニングに耐えなければならない。実行可能と  
思われる者は芸大内部に於るエリート集団の一員とな  
ることが果せるであろう。夢々一夜にして天才となり  
おおせるなどとは思ふなかれ、早朝の靈気を4年間吸  
い続けた者だけが才能の開花を見るであろう。」

●2時間目【理科】 下図作成“不自然さの研究”(参  
考図書・・・大日本画動物・植物図鑑。入手希望者は各  
博物館、美術館、画廊、及び公募展事務所まで)

●3時間目【社会】・学内世間営利団体との親睦なら  
びに、いがみあい。

●4時間目【国語】 「居直りの美学」についての討論  
に大半は費されます。

●お昼休み(大浦)(キャッスル)食堂関係者の方々、  
御苦労さまです。

●5時間目【音楽】 “恋のレッスン”

●放課後【課外活動】 自主参加を本旨とす。美術部  
・ただし、本格的な活動に入ろうとする者は本科よ

り、本科の主旨に合わないとの理由で白眼視されるこ  
と必至。



## ■芸術学科

お昼ごろになると、奏樂堂のあたり、キャッスルの  
近辺にポテポテと寄り集まって来て毎日せっせ、せっ  
せと通ってくる人も、数週間ぶりに顔を見せる人も、  
クラブに燃えてる奴も、時には一緒になることがあっ  
て、不平をこぼすときも割に淡白につぶやいて、とび  
ぬけて楽しいこともそう多くはないけれど、それでも  
たまには笑いころげてお昼休みが過ぎる。

何をやるかという事、或いは何をやらないかという  
事、また、そういった事を決めること、決めないとい  
う心づもりをすること あれやこれやと思いめぐつ  
ては月日が過ぎる。

たとえば、自分が心惹かれる物を身近に置いておき



たい時のために、その糸口をいっぱい手に持っておこうとする意志があって、そんな意志と、どの糸をたぐりよせるかを決める判断力、感性の為の判断力が欲しいのだろうか？

「ゲージツガッかって何するの？」と聞かれると大方は適確な応答ができずに、「美学と美術史を学ぶのだよ。」とごく一般的に済ませたつもりになって、「ゲージツガッカ」が何をする所なのかという事よりも、自分の勝手さ気儘さ加減をつきつめてみようとするのだろうか？それぞれの人、それだけ様々な方法と感覚が在ってなんともひと束にはしにくい集まりの個々、午後には2人3人と講義室の方に向かって歩いてゆく。



### ■工芸科デザイン専攻

「あいつはああいう趣味なんだよ」と言ってすべてを黙殺してしまうことはもうやめてください。我々の作ったもので、どれが良くてどれが悪いのかははっきり言ってください。あなたの批評が聞きたいんじゃないんです。あなたに言葉を取り戻してもらいたいんです。

何となく作り、見過ごしてしまうことの繰返し。自分の現状を黙認し否定と疑惑を忘れてわずかな範囲での“お役に立ちそうなこと”を捜し求める軽薄デザイナー予備軍。“受け入れられるもの”と“確かなもの”との区別を知らぬ白痴小手先職人集団。あなたはいったいどこで何を見ているのか。

最も大切なものを失いかけているような気がするんです。知識や技術では補えない何ものかを。——感じてください。1枚の写真、毎日歩く道、使いなれた様々な道具、電車の中で見た広告、好きな唄、自分の体、見えるもの聞こえるもの、人々の作りだした無数のもの、それらはあなたにとっていったい何なのか。自分が初めて撮った写真を手にした時の気持ちを覚えていますか。忘れかけてしまっているそれを今すぐ呼び戻さなくてはならないんです。

山道に迷いこんでひとりきり幾時間も歩きまわったことがあります。しだいに心細くなりどうしたらいいのかわからなくなっている時、道端に朽ちかけた小さな道しるべを見つけた感激が忘れられません。——ここにデザイナーがいたんだ！



### ■建築科

空と大地の間の無限の地平線の上に、その中間の物質のような形でもって、建築はさまざまな輪郭を構成して生み出されてくる。それは芸術的な観点からのみ、その形態の運命を与えられるのではなく、機能的、物質的、又は使われる素材などの諸要素にささえられて初めて、人間の生活の場として、その造形を許される。そうした多情多恨な創造物に従事するわれわれの仲間の特性が一口で言い表わせなくても、そのことで説明者個人の責任問題を問われることはあるまいと判断されたい。

太陽と海と山と、etc.の放浪の旅にも飽き、そして、おふくろの味大浦に帰ってくるころ、芸術祭の洗礼を受けるのである。新入生にとっては大学生活の新しい経験となる。我々が友を語る時、なぜか芸術祭の前後を比較して思い出話に花咲かせるのも、芸術祭が1つの分岐点としての性格を持っているからであろう。

どこか校内の片すみにたむろして、展示なり、模疑店を開いている建築科の学生を見かけたら、それはおもに一年生なのだが、それがぼくらの仲間の紹介文となる。



### ■工芸科工芸専攻

工芸科は1・2年次においては、工芸専攻の基礎教育として、工芸の基本となる、基礎的造形の勉強を行う。その内容は、人体デッサン、塑造(首・トルソ・全身像)、基礎デザイン(観察と描写、平面構成、立体造形、模写、模刻等)、である。2年次においては、実材実習があり、陶芸、鋳金、鍛金、彫金、漆、染織、の

中から3ないし4科目を選んで1科目1ヶ月間ぐらいの日程で、いろんな実材にふれ、基本的な技法を勉強している。3年次においては、自分の勉強したい科に分れて主として工房別による授業を行なっている。現在工芸科には、陶芸、鋳金、鍛金、彫金、漆、染織の6つの科があり、3・4年次において、その科別による、素材を生かした、制作上の基本的知識と技術を習得し、関連材料の学習および技術の修得を含め、創造する思考力と、それを表現する造形力を養成することを目標としている。3年の始めには古美術研究旅行があり、奈良、京都の古美術の勉強を行なう。4年の後期からは卒業制作を行なう、卒業してからは、大学院に残る生徒が多く、又、デザイナー、工芸作家として独立して造形活動をする人も多い。



### ■彫刻科

行為としての芸術には、音楽、絵画、文字等、様々なあれけれども彫刻も手段の違いこそあれ、根本を貫いているものは変りはない。

遠い我々の思いの及ばない頃より発し、その様式や彫刻の位置は屈曲、低迷、変化しながら現在に至っている。絵画と並んで最も源初的行為と云えるかも知れない。

それぞれの民族時代の文化は彫刻にも端的にあらわれている。現在を生きる我々は…。そして芸大は、たくましきオジサン、オネエチャンの集合であり、事につけてアルコールのニオイのする所。





## ■器楽科

器楽科の連中といえば、ピアノ・オルガン・弦楽器・管楽器・打楽器などをあやつる我々のことであります。我々は自分の楽器をあたかも恋人のごとくすばらしく、かけがえのないものに思い、またある時は、何か魔力を持った、自分の力ではどうすることもできない得体の知れないものに思うのです。しかしその楽器と共に一生音楽の道を歩みたいと決意した者であります。暑い夏の日々を、芸大の小さな練習室で汗を流しながら練習している学生の姿は、さわやかで美しい一面、何か狂気じみた厳しさを感じさせます。それは我々がすべてを忘れて、そこに青春の命をかけているからなのです。その我々にとっての一つの生きがいは、演奏会をもつことにあります。人の前で演奏する時の気持は、経験した者でなければ味わえない、ちょっとした陶酔であり緊張であります。そこにおいて、はじめて自分達の作り出した音楽を人々に伝えることができるのですから。

演奏会までのたゆまない努力と精神集中、演奏中の自分、そして演奏を終えた時の満足感と喜び、これらのことが我々をしてこのように芸術の道へとかり立てるのです。といってもこんなにいつも厳しさに追われているわけではありません。豊かな心から豊かな音楽が生まれ、そして愛にあふれる音楽が、世界の人々に愛を与えることができるのですから。我々はそれらを得るために、すこしでも時間があるとキャッスル（音楽学部内にある洋食堂）にたむろして20円のレモン水を飲みながら同志と意見をたたかわし、また練習の時間をさいて(?)はパチンコで指先の感覚と初見の訓練をし、授業をサボってはデートをするのであります。

そして時には徹マンにはげみ、アルコールで空元気を<sup>から</sup>つけるのです。

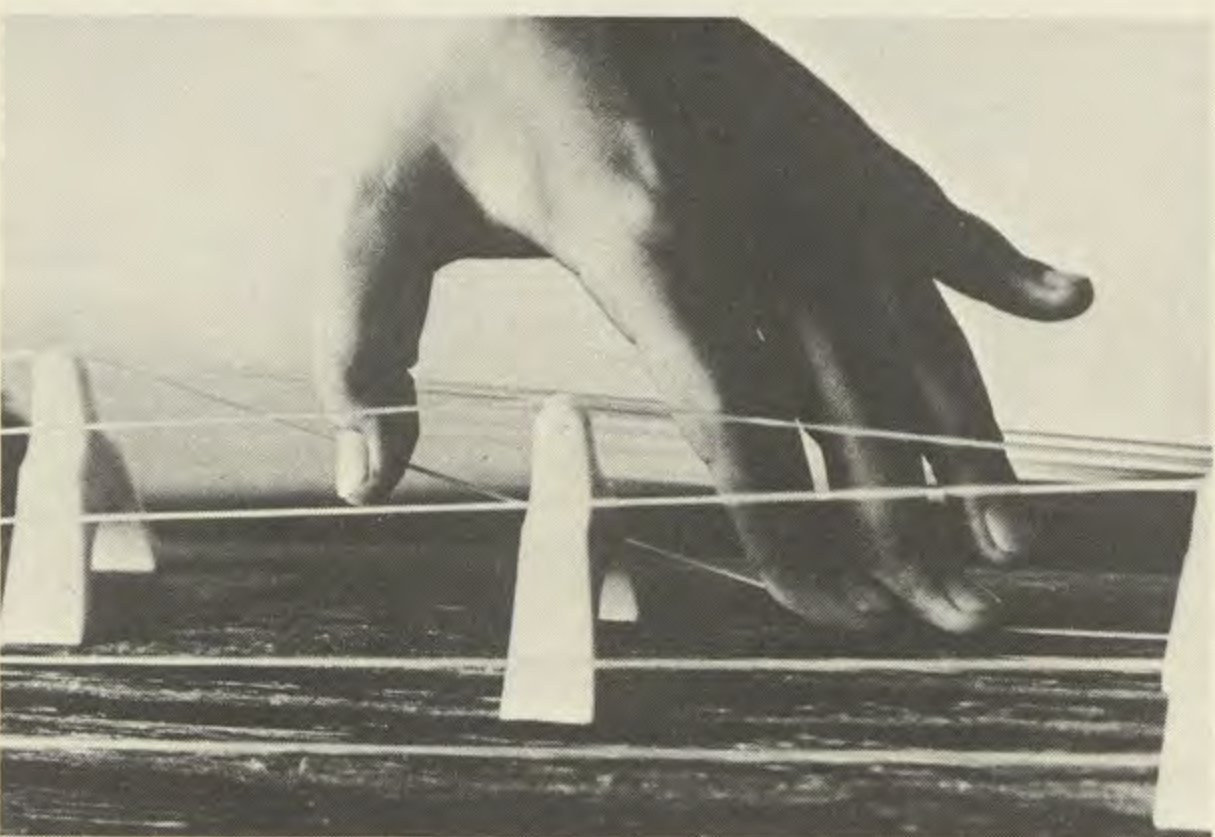


## ■指揮科

現在、指揮科学生四名(大学院一人含む)、そしてその先生方四名から成っている指揮科は非常に少編成ではありますが、それが、反映して生徒と先生方の接触は緊密、且つ音楽的にはもちろん人間的な育成まで諸先生方の熱心な御指導を受け、生徒として、これほど恵まれた環境で勉強出来るのも他に例がないかもしれません。

又指揮者というものは音楽のみならず、人格的にも(心理学的なものも当然含めて)完全でなければ、オーケストラ等の大ぜいの人々の心を統率してゆくことは出来ません。そのため指揮在学期間四年間(別に大学院は二年間)は、短いという声も一部ありますが、これは大学の組織上致し方なく、またそれは言い換えれば「四年間でこれだけ多くのことを学び取り得る科も少ない」と言うことが出来るでしょう。

ともあれ、社会的にも人間的にも非常に立派な先生方が多くおられるということが生徒にとっては最も幸福なことなのです。



## ■邦楽科

音校の1号館と3号館の3階、それから能楽堂に位置しているのが、我々邦楽科です。構成人員は、1学年20名弱。その4分の3が女性でありまして、「女の天下」的傾向が無きにしもあらずであります。

さて、皆さんの中には、日本人でありながら、日本の楽器に実際に触れたことがないとか、生の演奏を聞

いたことがないというような人がかなりいるのではないのでしょうか。そういった方は、是非邦楽科の部屋へ気軽にお遊びにいらして下さい。老若男女の別を問わず、すべての方に、親切で優しく、且つ美男美女揃いの(あくまで自称)我々が、手取り足取り、懇切丁寧に教えてさしあげます。申し遅れましたが、邦楽と申しましても、箏(生田流、山田流)、長唄(二味線、長唄囃子)能(観世流、宝生流、能囃子)という具合に分かれておりまして、楽器の数も多々あり、皆さんのお好み次第、よりどりみどりでございます。まあ、何はともあれ、是非一度日本の音を聞いてみて下さい。それに、邦楽科はカッコイイことに、着物なんか着かちやって登場するのであります。やはりこれは、日本のモノならではのことでですね。では、奏楽堂での演奏に乞う御期待!!

一寸、演奏会のPRみたいになってしまったようですけど。では又、会場で。



## ■声楽科

「オーイ姉ちゃんよーい。声楽科の紹介、て、どんなこと聞いたーい?」

「そうだねー。やっぱ、どんなこと勉強しているのか聞きたいわねー。学校の他にも自分でも練習するんでしょう。」

「うーん。もっと他に聞きたいことないの。人数とかさ。」

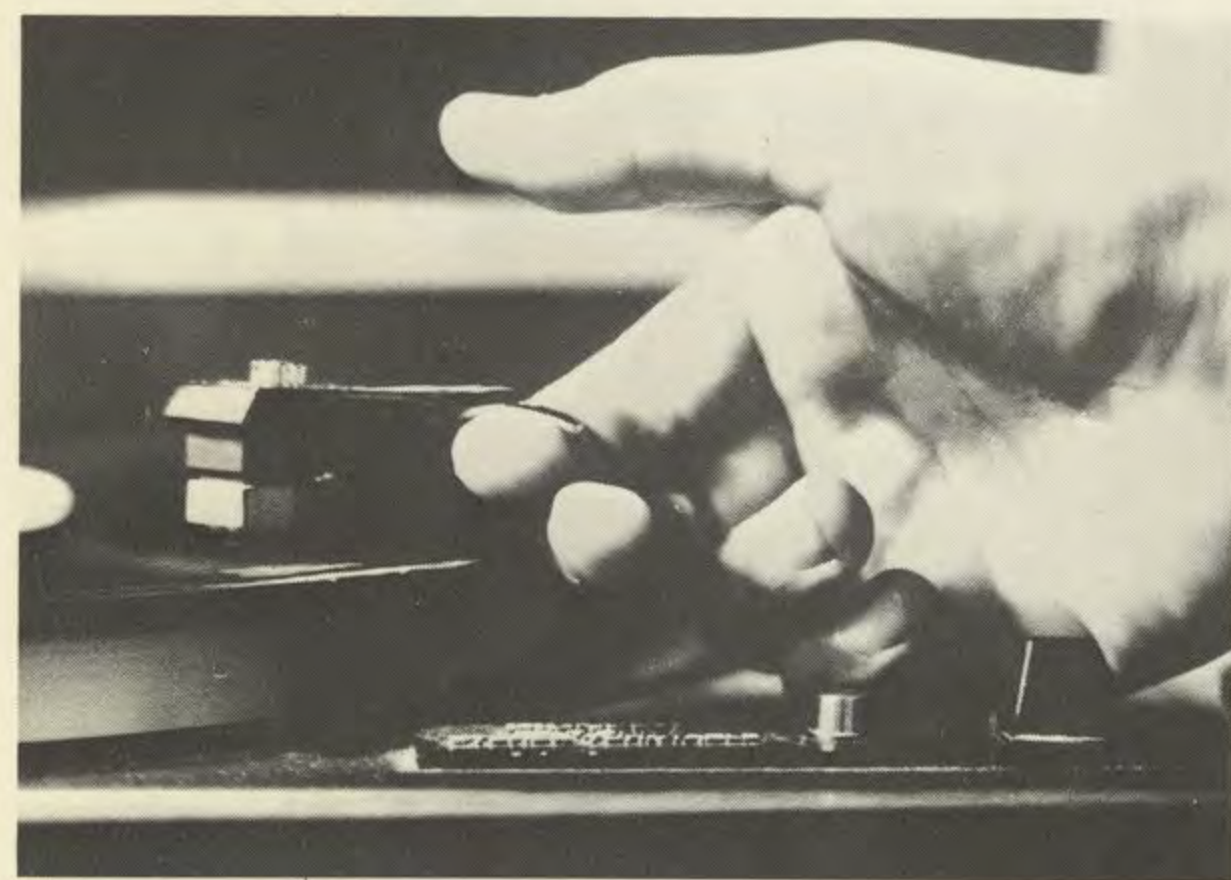
「ああ、そうねー。どんな人がいるとか、年令とか、まるでわからないから、そういうのも知りたいわねー。」  
というところで、えー声楽科は一学年約60人で、い





音楽学部

まだ紅顔の美少年から、もはや、妻子ある男丈夫までとりどりで、又、その気質もいろいろであります。考えてみるに声楽というのは音楽の中で最も練習時間に束縛されない分野であり、したがって世にいわれる音楽バカの最も少ない科であろうと思います。これは一面恥すべきことではありますが、声楽というものを志す以上、又、そうあらねばならぬ氣もします。ところで芸術祭には声楽科の飲食店 Voce が開業します。これは一度やってきて損はないですからぜひどうぞ。



## ■楽理科

今日も無事に一日が終わり久しぶりに妹とフトンを並べておしゃべりなどしてウトウトしかけた時、突然思い出したのです。そうだガクリの紹介文を書けと頼まれていたんだっけ……。何度か試みたんだけど私には

とても人に読まれてもいいような文章は書けず、もーいいや誰かほかの人に回してしまおうと思ったきりずっと放っておいたらあわや締切寸前。まだ少しは責任感があったらしく、見事にガバとはねおきて万年筆と原稿用紙をひっつかみ何でもいーから書いてやれと覚悟を決めたのです。ガクリの紹介文を頼まれた時私は何度も念を押しました。「ホントにアタシが書いてもいーのね。何書いてもいーのね。ガクリの面汚しになっても知らんヨ」と。

実を言うと私はガクリ科なんぞあまり好きではないのです。ゲー大にはいって一年余りその雰囲気肌に合わないことはなはだしく、今だにあのグロテスクなキャンパスの中で拒絶反応に身を震わせているのです。だからどんなに必死になってもろくな紹介文など書けるはずもなく、悲しいかな書く気にもなれません。よく人に「ガクリって何するの?」ときかれます。そんな時私は「音楽の理論的なことをやっております」とだけ答えて、どうかもうそれ以上尋ねてくれるなという願いをこめて相手を見つめるというよりにはらみます。本領からはずれっぱなしの自分にうしろめたさを感じ一人前にガクリとはあーですこーですなんて言いたくないのです。もしそれ以上詳しいことが知りたければ音楽校舎四階界限にたむろするまじめそーな人をつかまえてきいてみてください。



## ■作曲科

真直ぐに もの が 伸び もし  
世界と1度の角度で対したとしたら  
それは 何かを 目差しだすだろう  
そこに 力 は 存在しない  
太陽は 静かに 我々をめぐる

2月 春を 感じる

1日だけの 目覚め  
静かな太陽は 人間 を 知る  
ああ すばらしき 我ら

ものは 落ちるだろう  
すっきり と した 放物線を描いて

後にのこるのは ヴィオラの 哀しみ



祝  
東京芸術大学芸術祭

鷹美は予備校でも学校でもありません。制作者の立場になった、まったくユニークなシステム  
美大卒業後の制作の場としてご利用下さい。



**鷹美**

BIJUTSU

□裸婦クロッキー

□彫塑工房室

□陶芸工房室

□金属工芸工房室

□油彩工房室

□デッサン工房室

□版画工房室

等身大以上の塑像制作ができる 朝 昼は頭像モデル使用  
夜は裸体モデルの制作、他に模刻 テラコッタ 動物 基礎造形  
手廻しろくろ 蹴ろくろ 電動ろくろ等 本格的設備で  
素焼から本焼まで自由に制作出来る。  
彫金 鍛金 精密鑄造、エッチング、宝石研磨 七宝焼、等  
本格的設備で自由に制作できる。  
朝、昼、夜と1日3人の裸体モデルを毎日使用 他に静物画工房室  
があり 豊富なモチ フが用意してある。  
豊富な石膏像があり 照明は自然光に近い設備がなされ  
自由に制作出来る。  
銅版画 エッチング)とシルクスクリーンの制作  
エッチングプレス機のみも自由に利用出来る。

毎週土曜と日曜日の10時 1時 4時 6時半からの週8回 裸婦クロッキー料金だけで  
誰でも参加出来る。1回¥350 10回券¥2,500

東京⇄パリ往復¥13万

出発11月8日帰国12月8月1ヶ月間  
往復の飛行機内のみ団体现地自由解散

鷹美術アトリエ村

会員募集(入会案内書¥300円可)

東京都品川区上大崎1-3-16

〒141 TEL 代表 445 8831



上野  
松坂屋

電話 832 1111(大代表)

— 水曜定休 —

たとえば②番のコーディネート。  
のびのび自由。  
若さそのもののセンスです。  
視線集中 心うきうきの我が週末を嬉しくまとめるラッフルズ  
まず①番はウイントベインできまり  
話題の②番はジャンボなチエックが大きく大きく若さ発揮  
③番はジャカード編みのセーターでピタリ  
ットのプリントシャツがまさにきいている④番  
みんなみんなラッフルズなのです  
●本館2階ラッフルズセンターにございます

おとなのカジュアル

ラッフルズ

KAYSER

LICENSED BY KAYSER ROTH INC. U.S.A.

Ruffles Wear



SS-40Bの設計思想はまさに脱セパレートそのもの。まず、FM受信感度 $2.0\mu\text{V}$ 、実効選択度70dBステレオセパレーション40dBというハイグレード設計。一方、プリアンプにマイクミキシング回路を備えFM・AMなどプログラムソースと自由に共演を楽しめます。中身

の濃さはもちろん、黒を基調のパネルフェイスにもご注目。同調を視覚で確認できるチューニングメーターをはじめダイヤルスケールの動作もスムーズです。ファンクションセレクトスイッチはすべてプッシュボタンワンタッチでビシッと決まります。すべてにマニアライクな感覚です

さらに、SS-40Bは本命に4トラックカセットテープデッキを内蔵。レコード、FMを聴くだけでなくさまざまなソフトウェアを楽しめる秘密です。レコードやFM、日常の現実音、自分の名演奏。ちょっと注意すればレコーディングソースはいっぱい。マイク一本で、ごきげん

なテープコレクションを楽しめます。また、マイクミキシングを操作すれば、プロ級のディスクジョッキー。選曲・かけ合い・解説。なんでもござれ。パーティーなどに最適です。世界の一流アーティストと、マイクミキシングで共演、ついでに録音すればそれこそ幻の名盤？

と、ここまでの楽しみはほんの一例。聴くだけの受身派から抜け出して積極的に、個性的なソフトウェアの楽しみをあなたも発見しませんか？

◎SS-40B ——— ¥178,000



日本楽器製造株式会社

銀座店  
572-3111代

# 単に聴くだけという 受身派から抜け出しましょう。 参加し、創造する ステレオSS-40B





|       |   |             |                                                       |                                                                                                  |    |                                       |                                           |                                         |                                                     |      |
|-------|---|-------------|-------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|----|---------------------------------------|-------------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------------------------------------------|------|
| 10:30 | 1 | ブラームス       | バイオリン・ホルン・ピアノの為のトリオ                                   | Vn.古館真理子<br>Hrn.野瀬 徹<br>Pf.山本和美                                                                  | 8  | 伽倻琴による韓国の民謡                           | 砥板桂子<br>橋本和子                              | 後藤多恵子<br>増山賢治                           | 3:00                                                |      |
| 11:00 | 2 | シュベルト       | 美しき水車小屋の娘                                             | Bar.渡辺央己<br>Pf.山本和美                                                                              | 9  | モーツァルト バスーンコンチェルト                     |                                           | Fg.大埜展男<br>Cond.広井 隆<br>学生有志 Orch.      | 3:30                                                |      |
| 12:00 | 3 | 長唄          | 神田祭                                                   | 邦楽科長唄全員                                                                                          | 10 | バルトーク ピアノコンチェルト第3番                    |                                           | Pf.佐藤晴美<br>Cond.広井 隆<br>学生有志 Orch.      | 3:50                                                |      |
| 12:40 | 4 | 中田喜直        | 木の匙                                                   | S.西田広子<br>Bar.大道 裕<br>Pf.大藤玲子                                                                    | 11 | シュベルト 弦楽四重奏曲「死と少女」                    | Vn.Ⅰ稲垣琢磨<br>Vn.Ⅱ清水謙二                      | Vla.中竹英昭<br>Vc.庭野隆之                     | 4:30                                                |      |
|       |   | 水野賢司        | 二羽のうずら さびしさ ふるさと 舟出の歌                                 |                                                                                                  | 12 | オカリナの詩                                | 萩谷克己<br>渡辺まどか                             |                                         | 5:10                                                |      |
|       |   | 川上哲夫        | 水は呼んでいる ひとすじの道<br>若い日の想いによせる3つの歌<br>(朝の歌 故郷にて冬を送る 来意) | Bar.水野賢司<br>Pf.岩谷 緑                                                                              | 13 | オペラアリアとカンツォーネ                         | 丸山 久                                      |                                         |                                                     |      |
| 1:30  | 5 | 連続特別講演会 第1日 | 「無伴奏人体ソナタとは何か」<br>—— 講義と演奏と討論 ——                      | 出演 正岡泰千代<br>(作曲科)                                                                                | 14 | サン・サーンス<br>V.ダンディ                     | トランペットとピアノと弦の為の七重奏曲<br>古典スタイルによる組曲        | Trp.東 育雄<br>Pf.石附秀美<br>Fl.黒田育子<br>〃中野富雄 | Vn.伊賀純子<br>〃小笠原伸子<br>Vla.平田幸子<br>Vc.渡辺 宏<br>Cb.増山 成 | 5:40 |
|       |   | ※参考資料       | 人体ソナタに対する音楽学部学生205名のアンケート                             |                                                                                                  | 15 | ライネッケ                                 | フルートコンチェルト作品283                           | Fl.中野富雄<br>Conb.川合良<br>2年中心 Orch.       | 6:20                                                |      |
| 2:15  | 6 | 作品発表        | エスキース                                                 | 作曲 青木 進<br>Fl.串田 玄 Hp.山畑かや<br>Ob.武田洋子 Perc.明瀬由武<br>Cl.岩山真理子 〃石内聡明<br>Fg.金崎 守 〃藤井 礼<br>〃山本茂夫 〃森桓桂 | 16 | トランペット・アンサンブル<br>アルテノブルク<br>ビバ<br>トマジ | 7本のトランペットとティンパニの為のコンチェルト<br>ソナタ7番<br>組曲   |                                         | 7:00                                                |      |
| 2:30  | 7 | ブラームス       | 愛の歌                                                   | B.斉藤俊夫 S.坂田泰子<br>T.河合孝夫 A.岡崎智恵子<br>Pf.渋谷るり子 畑 美奈子                                                |    | その他                                   | Trp.小野 純<br>馬場和夫<br>岩井克昭<br>松田次史<br>曾我部清典 | 加古 勉<br>中村 等<br>上甲和博<br>織田準一            |                                                     |      |



# 第1ホール

|       |   |                              |                                                                                                                                    |    |                |                                  |                                            |      |
|-------|---|------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|----------------|----------------------------------|--------------------------------------------|------|
| 10:30 | 1 | 作品発表                         | Fl. Ob. Cl. Fg. Hp. の為のコンボジション<br>作曲 柴田 治夫<br>Fl. 黒田育子 Fg. 竹田雄彦<br>Ob. 城石賢明 Hp. 高見映理子<br>Cl. 大野孝儀                                  | 9  | アルビージ          | フルートトリオ第2番                       | Fl. I 徳安由美子<br>Fl. II 藤井倫子<br>Fl. III 前川祐子 | 3:30 |
| 10:50 | 2 | ベトベン                         | 弦楽四重奏 作品18-4<br>Vn. I 太田なち子 Vla. I 藤京子<br>Vn. II 小林みゆき Vc. 八十嶋龍二                                                                   | 10 | ハークス<br>ジャジウェイ | スウィート・チャイミング・ベルズ<br>オールウェズ・チアフル  |                                            | 3:50 |
| 11:10 | 3 | ヒンデミット                       | トランペットの為のソナタ<br>Trp. 岩井克昭<br>Pf. 岩谷 緑                                                                                              | 11 | 尺八部演奏会         | 千鳥の曲<br>流露<br>嵯峨の秋<br>春の海<br>その他 | Trp. 石田太<br>〃 植松武師<br>Pf. 草野裕子             | 4:10 |
| 11:30 | 4 | シュベルト<br>バッハ<br>フォーレ<br>ブラムス | バイオリンソナタ D. 408<br>無伴奏バイオリンパルティータ第2番<br>子守歌 月の光<br>バイオリンソナタ第2番<br>Vn. 蒲生克郷<br>Pf. 野平一郎                                             | 12 | チャイコフスキー       | 偉大な芸術家の生涯の思い出の為に                 | Pf. 沢田勝行<br>Vn. 大村俊介<br>Vc. 谷口節夫           | 6:20 |
| 1:00  | 5 | シュマン                         | おとぎ話<br>Pf. 畑美奈子<br>Vla. 百武由起<br>Cl. 寺澤嘉樹                                                                                          |    |                |                                  |                                            |      |
| 1:20  | 6 | M. レッガー                      | セレナーデ<br>Fl. 黒田育子<br>Vn. 石井美穂子<br>Vla. 岩崎玲子                                                                                        |    |                |                                  |                                            |      |
| 1:40  | 7 | フォーレ                         | ラシーヌの讃歌<br>その他<br>Trp. 東 育雄 Trb. 白石直之<br>〃 加古 勉 〃 萩谷克己<br>Tba. 向口 也                                                                |    |                |                                  |                                            |      |
| 2:30  | 8 | ヴィヴァルディ                      | 調和の靈感 全曲連続演奏その1<br>第1, 3, 4, 8番<br>Vn, Vla. 小笠原伸子<br>奥 うらら Vc. 前島直孝<br>蒲生克郷 服部隆司<br>松代祥子 Cb. 安保龍也<br>平山万里 GB. 野平一郎<br>山田 純<br>李 善銘 |    |                |                                  |                                            |      |



|         |   |                                     |                                            |                                                                                  |                            |                           |                                                                                                      |        |
|---------|---|-------------------------------------|--------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|---------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|
| 10・20   | 1 | 山田流演奏会                              | 熊野                                         | 箏 鈴木 厚 高田和子<br>三絃 亀山香野                                                           | 7 フランスのうた<br>ビゼー<br>J. コスマ | カルメンよりセギディリャ<br>枯葉<br>その他 | MS 小見佳子<br>Pf.小川清美                                                                                   | 3 : 10 |
|         |   |                                     | ゆく秋                                        | 佐藤順子 他                                                                           |                            |                           |                                                                                                      |        |
|         |   |                                     | 岡康砧                                        | 志村ゆり 小池延枝                                                                        | 8                          | バルト ク                     | 弦合奏の為のディヴェルティメント                                                                                     | 3 : 40 |
|         |   |                                     | 嵯峨の秋                                       | 本手 石塚とも子, 替手 高野秀子                                                                |                            |                           | Cond 川合良<br>1, 2 年有志Orch.                                                                            |        |
|         |   |                                     | 八段の調                                       | 本手 高野秀子, 替手 亀山香野                                                                 |                            |                           |                                                                                                      |        |
|         |   |                                     | 臼の声                                        | 宮崎定江 小池延枝                                                                        | 9                          | ラベル                       | ピアノコンチェルト                                                                                            | 4 : 10 |
|         |   |                                     | その他                                        |                                                                                  |                            |                           | Pf. 中井はるひ<br>Cond. 広井 隆<br>有志 Orch.                                                                  |        |
| 12・20   | 2 | シュ ベルト                              | 八重奏曲                                       | Vn. 木川玲子 Cb. 文屋充徳<br>〃 鈴木千恵子 Cl. 佐川聖<br>Vla. 李 善明 Hrn. 野瀬 徹<br>Vc. 山崎 聡 Fg. 成田孝司 | 10                         | ウェ ベルン<br>ベルリオ ズ          | 管弦楽の為の6つの小品<br>序曲「ローマの謝肉祭」                                                                           | 4 : 40 |
|         |   |                                     |                                            |                                                                                  |                            |                           | Cond. 加納由貴夫<br>学生 Orch.                                                                              |        |
| 12 : 50 | 3 | シュ マン                               | 詩人の恋                                       | B. 桑原啓郎<br>Pf. 増田宏昭                                                              | 11                         | ブラームス                     | ピアノコンチェルト第2番                                                                                         | 5 : 10 |
|         |   |                                     |                                            |                                                                                  |                            |                           | Pf. 藤森美和子<br>Cond. 礎部周平<br>有志 Orch.                                                                  |        |
| 1 : 30  | 4 | スクリャ ビン                             | ピアノコンチェルト                                  | Pf. 渡辺健<br>Cond. 川合良一<br>有志 Orch.                                                |                            |                           | Vc ノロ 阿部雅士                                                                                           |        |
| 2 : 00  | 5 | 連続特別講演会 第2日<br>「音楽とは 何か」* ——演奏と講議—— | 講議と人体ソナタ 正岡泰千代<br>(作曲科)<br>無伴奏Vn. ソナタ 稲垣琢磨 | 12                                                                               | モーツァルト                     | 13 管楽器の為のセレナーデ            |                                                                                                      | 6 : 10 |
|         |   |                                     |                                            |                                                                                  | 13                         | ヘンデル<br>ドビッシ<br>ベ ト ベン    | バイオリンソナタ作品1 12<br>バイオリンソナタ<br>バイオリンソナタ作品30 2「アレクサンダー」<br>Vn. 大村俊介<br>Cem. 岩崎まみ子<br>Pf. 小幡玲子<br>〃 渡辺健 | 7 : 00 |
| 2 : 50  | 6 | モ ツァルト                              | 音楽の冗談                                      | Vn. I 石黒 章 Cb. 文屋充徳<br>Vn. II 竹内陽子 Hrn I 野瀬 徹<br>Vla. 岩崎玲子 Hrn II 海老根允彦          |                            |                           |                                                                                                      |        |



10:00 1 邦楽演奏会  
能楽

観世流舞囃子  
大鼓 佃 良勝  
小鼓 五木田紀子  
笛 益田幸子  
敦 盛 河西暁子  
佐々木洋子  
山田芳江  
地謡 鶴沢久  
三村恵子  
観世流仕舞  
玉 鬘 三井恵子  
小袖曾我 駒瀬直也  
関根知孝  
昭 君 鶴沢久

宝生流舞囃子  
大鼓 佃 良勝 太鼓 鶴沢久  
小鼓 五木田紀子 笛 藤田次郎  
融 渡辺他賀男

11:00 山田流

江の島 箏 佐藤順子 唄 高田和子  
三絃 亀山香野

平調合奏曲 大山英子 瑞穂昌子  
玉井俊子 山田文女

生田流

菊の栄 箏 石本さとみ  
三絃 新宮順子 飯田千恵子  
富田万紀子

砧 新宮順子 飯田千恵子  
富田万紀子

長唄

舟弁慶 唄 尾崎珠子 囃子 矢崎 豊  
三味線 伊藤千恵子

1:30 2

ラフマニノフ ピアノコンチェルト第2番

Pf. 佐藤 俊  
Cond. 重松正大  
2年中心Orch.

2:10

3 連続特別講演会 第3日  
「無伴奏人体ソナタ『狂気への誘い』と芸大生たち」  
——演奏と講義——

出演 正岡泰千代  
(作曲科)

4 ドヴォルザーク 新世界より

Cond. 加納由貴夫  
" 広井 隆  
3年学生Orch.

2:50

5 作品発表

Cl. Vla Vc Pf. の為の小品  
作曲 高見富志子

3:50

2本のFl. と Cl. Vn Vc. Hp. の為の小曲  
作曲 小川清美

6 ヴィヴァルディ

4つのバイオリンの為のコンチェルト

Vn. I 今村恭子 Cond. 加納由貴夫  
Vn. II 城 みどり Cem. 和久菜々穂  
Vn. III 古館真理子  
Vn. IV 美井晶子 3年有志Orch.

4:15

7 モーツァルト

トリオ

Cl. 佐川聖二  
Vla. 安達いずみ  
Pf. 広瀬美紀子

4:35

8 トロンボーン・アンサンブル

ベ ト ベン 3つのエクアール  
バッハ パッサカリア  
メンデルスゾーン マッサイーン  
W ハ トレイ カンツォーナ1969

Trb. 伊藤 清教官  
Trb. 専攻学生

4:55

9 平尾貴四男  
矢代秋雄

ピアノソナタ  
ピアノソナタ

Pf. 吉村知子

5:35

10 作品発表

合唱叙事詩「モーセ」

1章 苦役 4章 荒野  
2章 子守歌 5章 過ぎ越し  
3章 決意 6章 出発

作曲 西田元子  
作詩 大谷裕一

Pf. 西田元子  
Bar. 竹林陽二  
Cond. 大木俊夫  
有志コーラス

6:05

11 トュイレ

ピアノと管楽の六重奏曲

Pf. 山田百合子 Cl. 金 元  
Fl. 大竹泰夫 Fg. 吉田 誠  
Ob. 山田睦雄 Hrn. 野瀬 徹

6:45



# 第1ホール

10:30 1 R. シュトラウス原曲  
F. ハーゼンエール ティル・オイレンシュピーゲル・アインマール・  
アンダース  
Vn. 尾花清光 Cl. 寺沢嘉樹  
Cb. 奥田 夫 Hrn.  
Fg. 成田孝司

10:50 2 ベートーベン バイオリンソナタ第9番  
Vn. 伊勢久乃  
Pf. 小西千鶴

11:30 3 ベートーベン ピアノソナタ「テンペスト」  
Pf. 小西千鶴

4 プッチーニ 「トスカ」より  
ふたりきりの愛の巣に 歌に生き愛に生き  
S. 野上芙美子  
Pf. 小西千鶴

12:00 5 テレマン トリオソナタ  
バッハ 「音楽の捧げ物」よりトリオソナタ  
モーツァルト フルート四重奏  
Fl. 中野富雄 Vn. 石井美穂子  
" 藤本千枝子 Vc. 寺井庸裕  
Ob. 斉藤享久

12:50 6 ペルゴレージ スタバート・マーテル  
S. 森川都喜子 Org. 岩崎真実子  
A. 松田由理子 Vn. 美井晶子  
他

1:30 7 ボロディン 弦楽四重奏曲第2番  
Vn. I 石黒 章 Vla. 岩崎玲子  
Vn. II 佐藤美都子 Vc. 山崎 聡

2:00 8 ヘンデル トロンボーンコンチェルト  
Trb. 杉本龍行  
Pf. 藤井孝子

2:30 9 ドビッシェ バイオリンソナタ  
プロコフィエフ バイオリンソナタ  
Vn. 木村真弓  
Pf. 杉山哲雄

10 ドビッシェ フルートとビオラとハープの為のソナタ 3:00  
Fl. 糸井正博  
Vla. 木村真弓  
Hp. 宮田ふたば

11 ブラームス クラリネット五重奏曲 3:40  
Cl. 四戸世紀 Vla. 福本とも子  
Vn. I 清岡正子 Vc. 赤松光章  
Vn. II 扇智佳子

12 ヴィヴァルディ 調和の靈感 全曲連続演奏その3 4:20  
第12, 5, 6, 10番

13 フランク バイオリンソナタ 5:00  
Vn. 尾花清光  
Pf. 渡辺健二

14 ブラームス 六重奏曲  
Vn. 尾花清光 Pf. 渡辺健二  
他

15 M. ブラウヴェ フルートソナタ 6:00  
Fl. 大竹泰夫  
Org. 長谷川久美子

16 ラベル 序奏とアレグロ 7:20  
Fl. 野口博司 Vn. I 木村真弓  
Cl. 四戸世紀 Vn. II 鈴木千恵子  
Hp. 宮田ふたば Vla. 百武由起  
Vc. 谷口節夫

17 打楽器オンパレード 7:40  
ロメオとジュリエット, ミセスロビンソン  
他ムードミュージック3曲  
打楽器アンサンブル1曲  
打楽器専攻学生



学校法人 服部学園

# 御茶の水美術学院

本科 3年制 全日制

デザイン部 グラフィック、インダストリアルデザイン

絵画部 油絵、基礎デッサン

基礎科 1年制 午前 午後 夜間

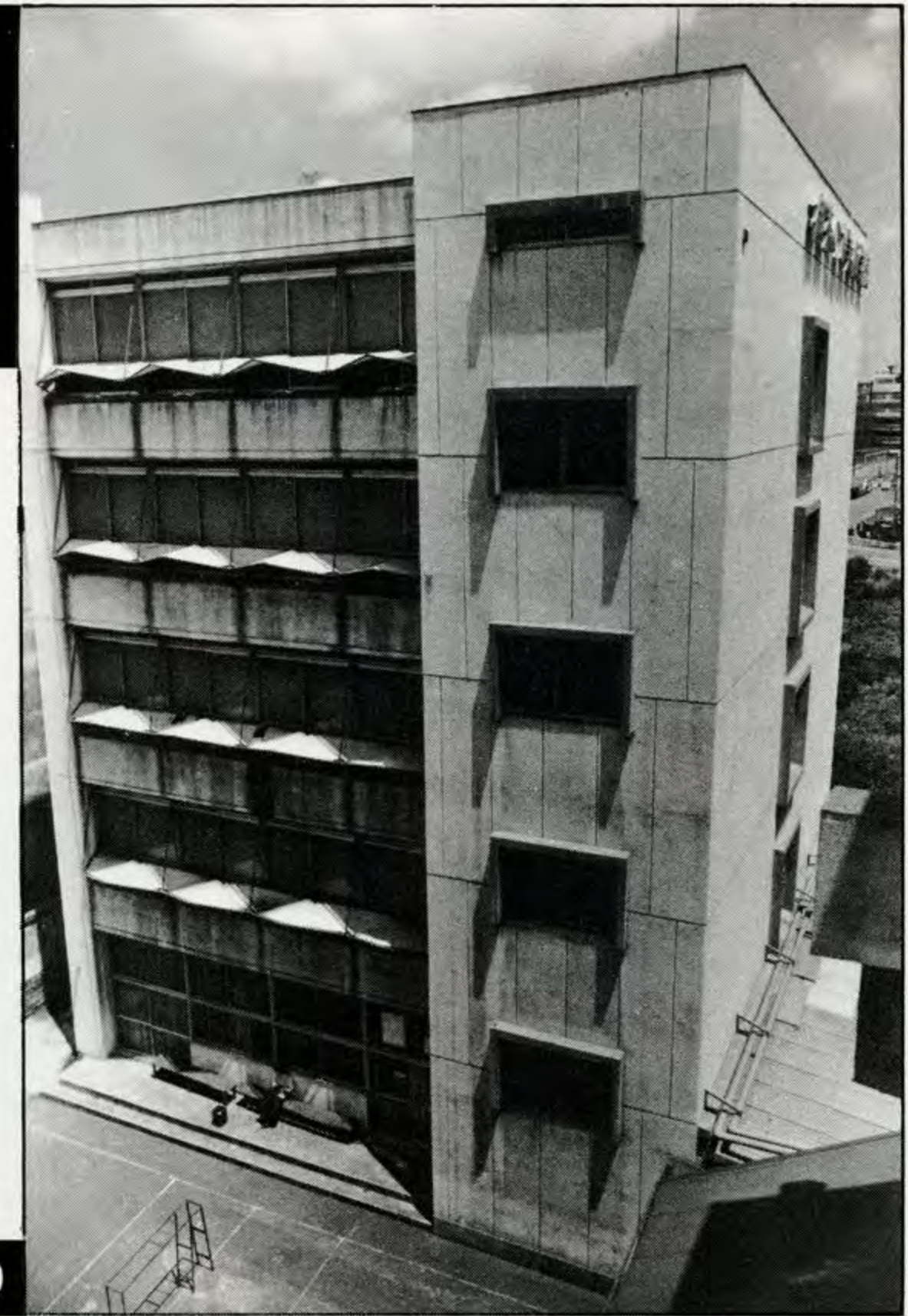
デザインコース、建築コース、日本画コース、油絵コース、彫塑コース  
デッサンコース

特別クラス 4:00p.m ~ 5:45p.m 高校在校生対象石膏デッサン

講習会 春期 夏期 冬期

交通至便：国電お茶の水駅（明大側）交番横徒歩2分 学院案内 千共 250円

東京都千代田区神田駿河台2 3 千101 電話 東京(03) 293 8736(代) 振替 口座 東京63949



REMBRANDT ARTISTS' OIL COLORS MADE IN HOLLAND

FLYING EAGLE ARTISTS' OIL COLORS MADE IN CHINA

内外の洋画材料を豊富に揃えています。

## 中国画材株式会社

豊島区南池袋 1-21-8 TEL. 988-6531

池袋東口西武前





「われわれは、社会に対して物質的な貢献をすると同時に  
道義的、文化的な貢献をも果たさなければならない。」

オリベッティは、この企業理念を信じ、65年の歴史の中で実践してきました。

「最も尊重しなければならないものは《人間》であり、いかなる時代にも、決して、  
技術や物質が人間の上位をなしてはならない。」

カミロ・オリベッティ

オリベッティ創業者／科学者／哲学者

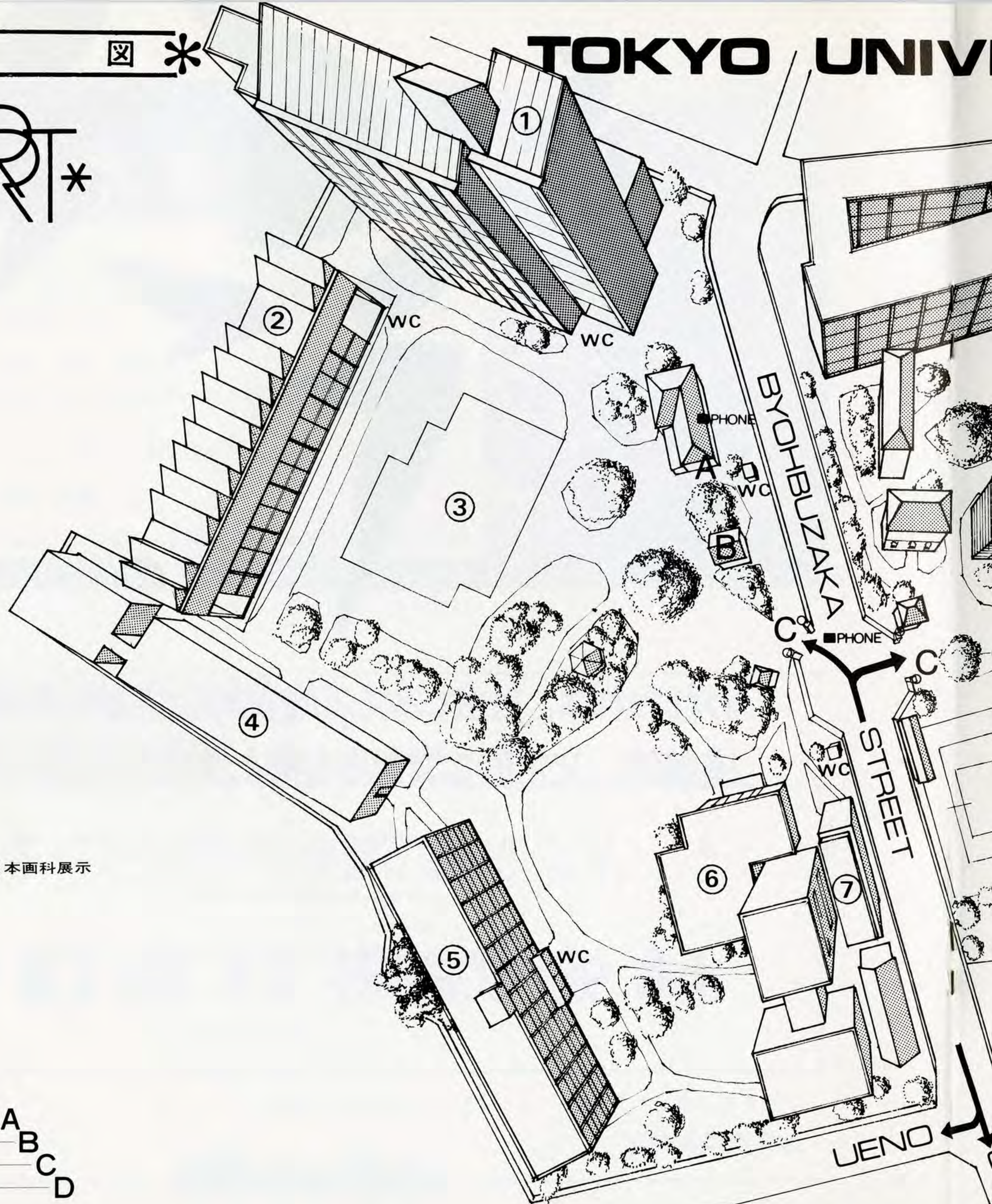
(1868年生～1943年歿)

**olivetti**



\*ART\*

TOKYO UNIV

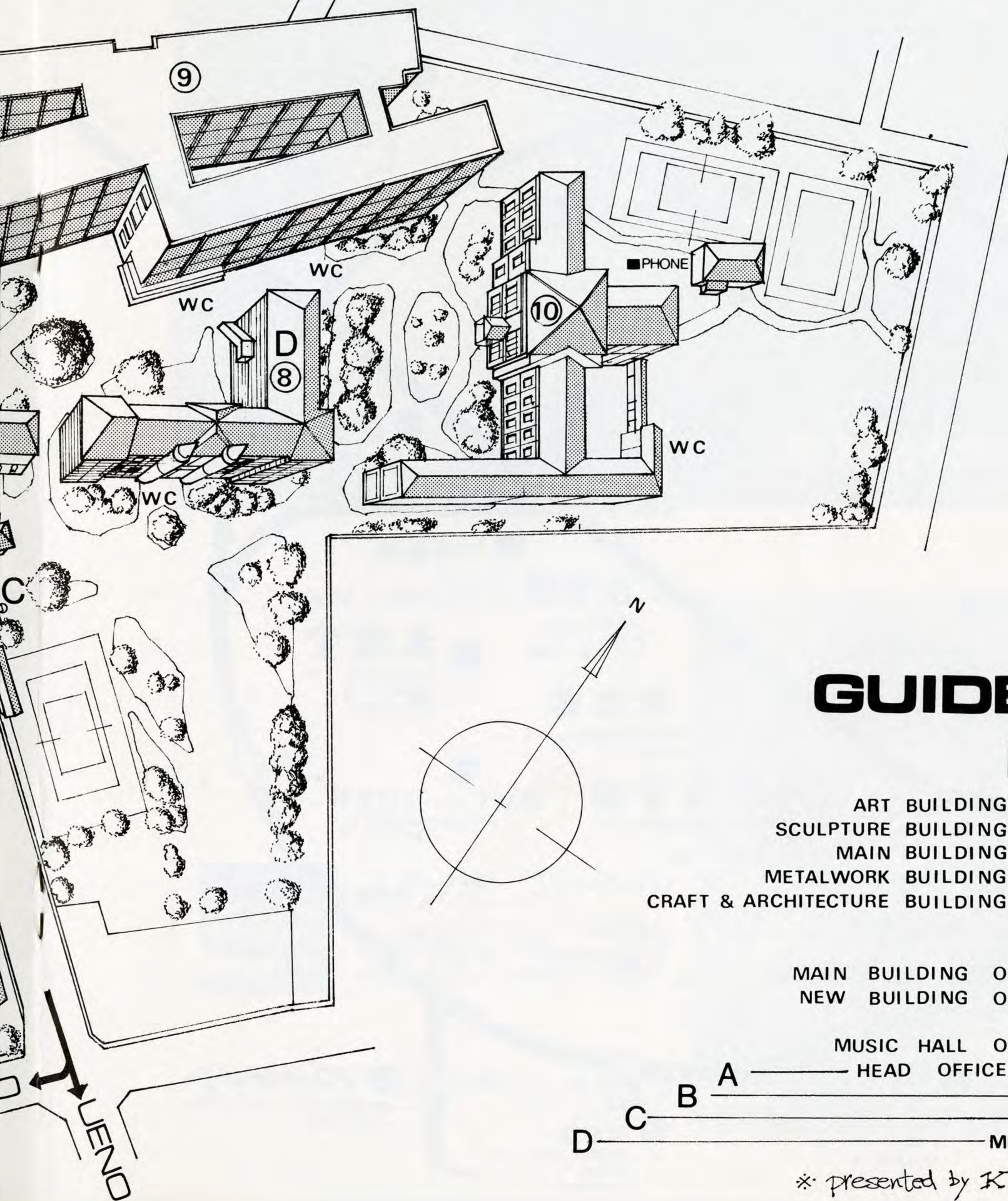


- ①美術学部新館絵画棟＝油・日本画科展示
- ②美術学部新館彫刻棟
- ③美術学部本館工事中
- ④美術学部金工教室
- ⑤美術学部工芸新館
- ⑥附属図書館
- ⑦陳列館
- ⑧音楽学部本館
- ⑨音楽学部新館第1ホール  
音楽学部新館第2ホール
- ⑩音楽学部奏楽堂
- 芸術祭本部
- 生協
- 受付
- 救護室

A  
B  
C  
D



# UNIVERSITY OF ARTS\*ART-FAIR 1973



## GUIDE MAP NOTES

ART BUILDING OF ART DEPARTMENT ①  
 SCULPTURE BUILDING OF ART DEPARTMENT ②  
 MAIN BUILDING OF ART DEPARTMENT ③  
 METALWORK BUILDING OF ART DEPARTMENT ④  
 CRAFT & ARCHITECTURE BUILDING OF ART DEPARTMENT ⑤

LIBRARY ⑥

PICTURE GALLERY ⑦

MAIN BUILDING OF MUSIC DEPARTMENT ⑧

NEW BUILDING OF MUSIC DEPARTMENT ⑨

1st HALL & 2nd HALL

MUSIC HALL OF MUSIC DEPARTMENT ⑩

A ——— HEAD OFFICE OF ARTS FESTIVAL ■

B ——— UNIV CO-OP ■

C ——— INFORMATION OFFICE ■

D ——— MEDICAL RELIEF SATION ■

\* presented by K. NOTIRI & M. HAYASHI.



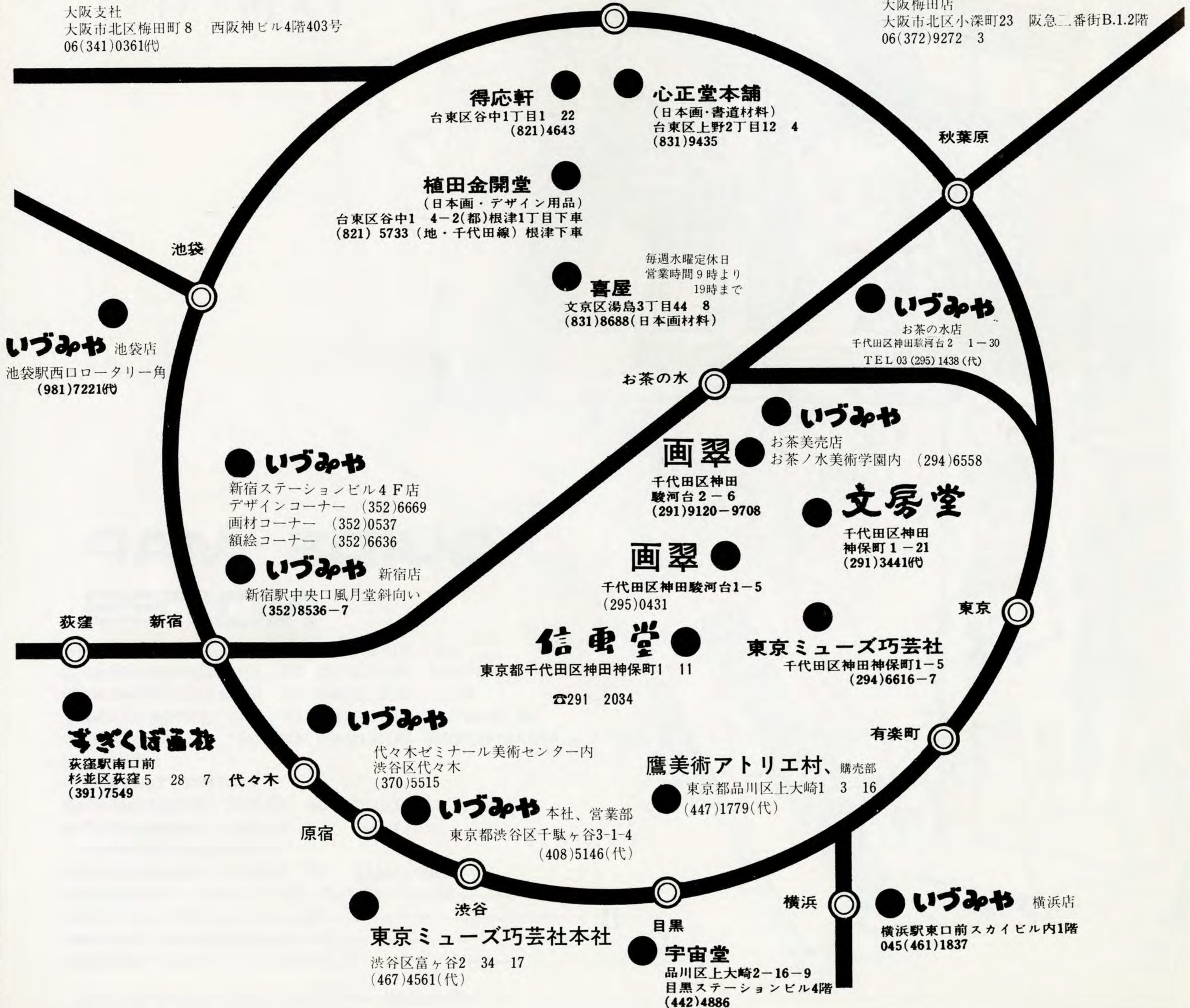
# 東京芸術大学芸術祭協替画材店

## ● いづみや

大阪支社  
大阪市北区梅田町 8 西阪神ビル4階403号  
06(341)0361(代)

## ● いづみや

大阪梅田店  
大阪市北区小深町23 阪急二番街B.1.2階  
06(372)9272 3







## デザイン専門部

〈全日3年制〉

ヴァジュアル・デザイン系  
(視覚伝達デザインを追求する)

スペース・デザイン系  
(環境デザインを追求する)

## 受験部

油絵科

デッサン科

工芸デザイン科

日本画科

高校生クラス

 **阿佐ヶ谷美術学園**

東京都杉並区梅里1-3-3 電話(03)313-8655(代) 入学案内〒350

コカ・コーラは The Coca-Cola Company の登録商標です



スカッとさわやか  
**コカ・コーラ**

東京 コカ・コーラ ボトリング 株式会社  
TOKYO COCA-COLA BOTTLING CO., LTD. 〈コカ・コーラ指定会社〉











- ④文庫——現在の資料館のようなもので、卒制などを収める。戦火でその卒制はかなり焼かれたとのこと。
- ⑤あずま屋——いわば花園の中心にある休憩所で、何があるわけでもなく、ただ、屋根と椅子のみで、スケッチしていた者が画材などを置いたりしていたとか。
- ⑥柔・剣道場——ここについている風呂場に各運動部員が集まったものらしい。
- ⑦すもう土俵——昭和初期、すもう部が全盛の時であった。

### ■なぜ上野公園に芸大があるのか？■

上野公園には、東京文化会館や西洋美術館のようなモダンな建物ばかりではなく、二本杉グラウンド横のオバケ燈籠や、動物園脇の五重塔・東照宮など江戸時代の古い建物までもある。これらは江戸・東京の歴史500年の縮図でもある。

この地は、その昔、津軽家、堀家、藤堂家などの屋敷のあったところであるが、寛永2年に一代将軍秀忠が、江戸城から見て、丁度、鬼門の方角に当たるところから、江戸城の鎮護と天下泰平を祈願するために、京都の比叡山延暦寺にならい、東叡山寛永寺を興した。その規模は、上野の山全体に広がる一大伽藍であったようだ。また寛永寺の天海僧正が無の桜好きで寺域に桜を多く植え、江戸町人には当時から桜の名所で親しまれていたようだ。この大伽藍も、明治維新の5ヶ月にわたる上野戦争で灰燼に帰してしまったが、若し彰義隊が上野に陣をしかなかったら、私達の歴史の部分は変わっていたかも知れない。

この広大な空地は、明治政府成立と同時に政府所管、東京府管理の公有地となり、またたくまに各省庁の狙うところとなった。明治3年、文部省は根本中堂跡（今の噴水）に大学東校（医大）の病院建設計画を建てたが、寛永寺に反対された。次いで5年、兵部省（陸軍省）は寛永寺本坊跡（今の国立博物館）に陸軍病院と墓地の計画を建て、長崎の医学校雇外人教師Dr. A.F. Bandwinを派遣して下見をさせる。彼は病院用地よりも公園にすべきだとの建白書を政府に出した。政府はこれを受け6年公園設置に関する太政官布告を出し、寛永寺跡地は公園指定を受け、東京府が管理者となる。

上野公園制定以来、公園計画を最も熱心に推めた人物は、



明治2年

大学大丞町田久成である。現在ならば文部省課長に当たるだろうか。明治4年に「古器物保存の議」建議して以来、国内外の各博覧会の企画を手がけ、後、内務省に転じ、博物館長をし、15年に退官する迄博物館畑を一途に歩いた人である。彼が上野公園を博物館及び図書館の最適地として建議したのは、明治6年6月24日のことで、末だ文部省に勤めていた時である。翌7年、湯島と小石川にあった博物館の施設、人材含めて、内務省に移管されるが、町田久成は内務省でも、博物館・図書館・動植物園の設置に関する上野公園計画を建議する。建議を受けた内務大臣大久保利通は町田案を実施し始めるのだが、ここで収まらないのが博物館と用地を取られた文部省と、形だけの管理者にされた東京府、この一者が一つ巴の騒ぎを展開することになる。この第一の「上野戦争」の結果が一つの博物館の誕生である。明治9年に竣工する東京博物館＝後の教育博物館・現在の科学博物館、と13年に竣工するコンドル設計の博物館である。前者の東京博物館は、明治20年に東京美術学校の校舎になる建築で、今の芸大のテスコトと陳列館にまたがる位置に建てられた。

この建物がなぜ美術学校の校舎になる運命をもたされたかということ、先に述べたように、ウィーンの万国博覧会の後、内国勸業博覧会との関係もあって、博物館関係施設・人材ともども内務省に編入されるが、文部省はこのことが大変に不満であった。大衆教育の見地から、上野公園に博物館、美術館、図書館、動物園を建てる計画のあることを内務省に申し入れ、同時に公園地域を文部省に返還することを要求したが、勸業博から文部省を締め出した内務省は、全くこのことには耳を貸さなかったらしい。このことがあってか、上野で開かれた第一回、第二回の勸業博には、す

ぐそばに教育博物館があるのに全く使用していない。文部省でも意地を張って教育博物館を建てたものの、運営は順調でなかったらしい。丁度その時、かねてから音楽・美術教育機関の準備をしていた文部省は、19年に、フェノロサ、浜尾新、岡倉天心の欧米美術教育の調査報告を得て具体的な検討にかかるが、その答は効率の悪い教育博物館を廃し、その施設を使用し、美術学校にすることだった。時の文部大臣森有礼は博物館については、あまり関心をもっていなかったという。若し、先に述べたような状況がなく、上野に美術学校が建たなかった場合、恐らく小石川の植物園に音楽学校と美術学校が仲良く建ったのではないかと想像している。理由は、文部省用地であること、敷地がかなり広いこと、美術学校・音楽学校の前身である美術音楽の取調所があったこと、などである。

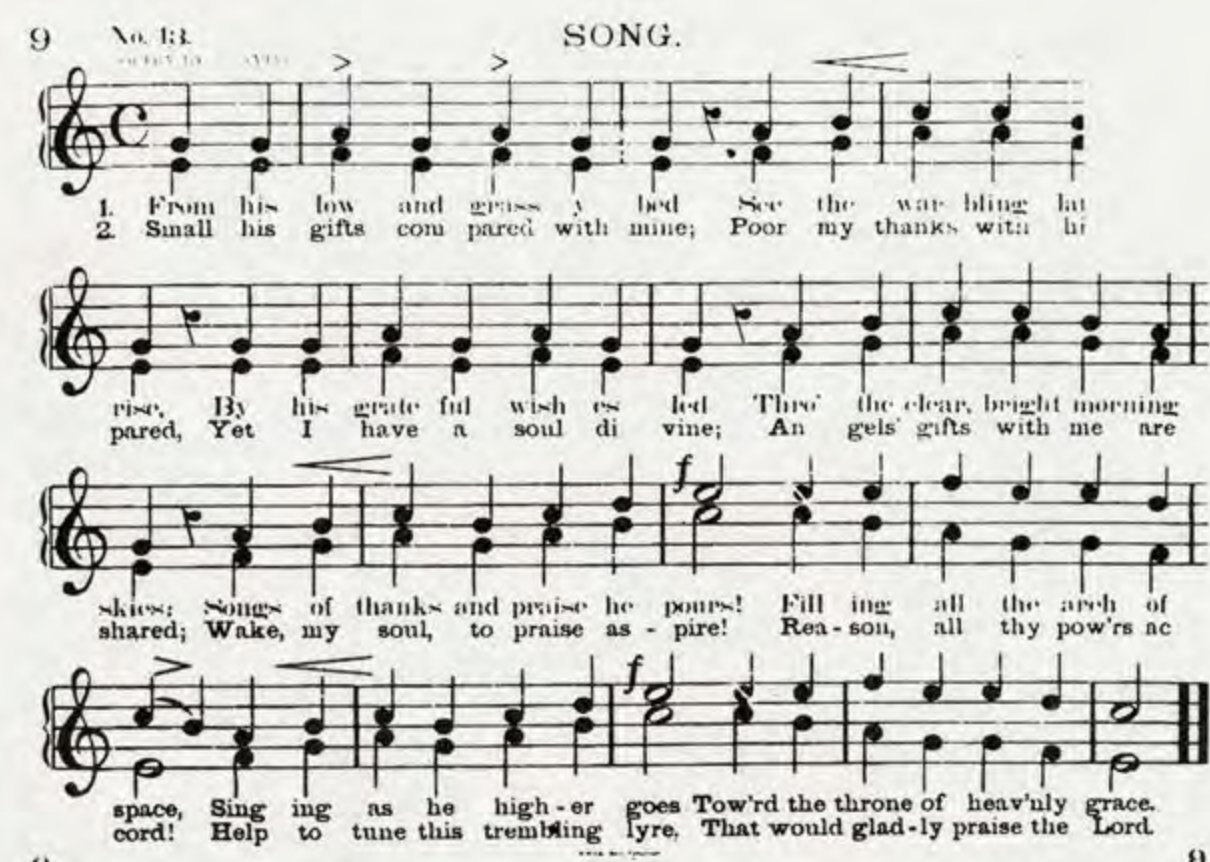
明治6年の町田久成の上野公園計画は、今日その通りになってしまった。博物館を文部省に、という明治8年以来の文部省の念願は、二次大戦後に実現された。私達の通う芸大も、幸か不幸か明治官僚の亡霊の争いの谷間に存在し、夕べの梵鐘はその争いをなぐさめているのかも知れない。

（建築科助教授 前野 崑）



## 音楽教育創始談

明治3年（1870）2月、小学規制及び中学規制が定められたが、これは実施されなかった。わが国現在の教育の基礎は明治5年の学制によって確立したといえる。その中で小学校に「唱歌」中学校に「奏楽」というのが加えられていたが、実際には行なわれていず、実際は文部省の「音楽取調掛」の創設により、わが国の音楽教育は創始されたといつてよい。



メーソン氏がアメリカより持参し、使用した同氏編著唱歌教授用掛図

これは音校の初代校長である伊沢修二氏が米国の師範学校に留学中、音楽を学び、その教育上必要なることを感じ、文部省に主張したところ設置されたものである。当時この音校の前身とも言うべきものは、本郷の文部省敷地内にあり、今でいう東大構内であろうか。とにかく、内外音楽取調と、師範学校付属小学校、幼稚園生徒への唱歌教授が当面の仕事ではあった。また、唱歌を全国に伝えるため、音楽伝習人22名を集め、斯して教師と生徒はできあがったが生徒に教える歌曲がそろっていなかった。当時の教師メーソン氏は、一つずつ、これを作成して、演習の時毎に、黒板又は黒壁に記して、教えるという有様で、その苦心は想像に余りある次第であった。

さて音楽取調掛は明治20年10月4日、東京音楽学校と改称され、23年2月、元、西四軒寺跡なる現位置に、17000坪余の敷地と380坪余の校舎、40坪の練習室をもち盛大な開校式が行なわれた。現在の奏楽堂はその当時よりの建物である。

明治26年、東京高等師範学校付属音楽学校とはなったが、伊沢修二、高嶺秀夫他19名は高等教育会議それは“音楽を衰退に傾ける者の如し”と建議案を提出、この運動が効を奏して明治32年、再び東京音楽学校は独立した。

時代もおしせまって第二次世界大戦後、わが国の諸般制度に大変革があり、長い伝統をもつ東京音楽学校は隣接の東京美術学校と合併して、国立の芸術大学を形成し、その音楽学部として発足することになった。

そして、今、そしてその後、芸大音楽学部は、如何に運営されていくであろうか。それは計り知れないにしても、過去の長い輝かしい歴史を背負って、他の音楽教育の諸大学と協調を保ちながら、指導的役割を果たしてゆくことは疑を容れないであろう。



メーソン教師と音楽取調掛助教

上野公園地元西四軒寺跡に新築された当時の東京音楽学校校舎（現在地）





●大正末期、美校といえば、女の人は食堂とか、モデルさんとかで、モデルさんでのいざこざも耐えなかったようだが、すぐ裏にある音校の女の子が、美校生として目についたらしく、当時、たわいないちょっかいを出したものらしい。

音校の正門の前は美校の土手堀でそのむこうに、工芸の塑造室。ここで実にリアルに、えげつなき物を土手堀のしげみに立て、からかったとか。

今日見られるような美術学部生の露出癖？は、このころよりあったという話。

●また、ある時は音校・美校のテニスの試合で、建築用の材木の上で観戦の女学生。当時美校生は男のみ、これに反し、音校は3分の2ぐらいが女。これがすべて大和撫子であったのかと思うとそうでもない。美校生も言い負けるかと思われる黄色い声が響きわたった。もとより音校発声は得意、しかも、その内容もかなりきつい。そこで1ついやがらせをと思った美校生、その女学生の材木の下でふせるや、「見えた！」とかなんとかやりだした。上の女学生、はかまのすそをおさえて一言「け、けがらわしい！」

■●このころ正服がどうだったかと言うと、美校男子は、丸い帽子に美の徽章、各科のバッヂをつけた学生服にコルテンのズボン。音校男子はというと黒背広、黒ネクタイ。女子は平服であったが、「華美にならざる



美校工芸部前（昭和3年）



物。」演奏会では、男子は正服に黒い蝶ネクタイ。女子は、紋付、袴。今日考えるにおかしい気もするのだが、当時、女子音校生が紋付、袴で並んだ図も、なかなか壮観であったらしい。

## 私の美校生時代

須藤雅路(工芸科名誉教授)

私が美術学校に在学したのは50年も前の、大正9年から14年にかけての5年間で、大分昔の話だから、こまかいことは忘れてしまっている。その頃の上野公園は今の公園とは全く趣きが異っていて、博物館の前から山下にかけて、狭い道の両側に桜の太木が続いて、花時には花のトンネルがあった。それが朝日に映えて何とも言えない風情を見せていた。その桜も緑の古木も、大正11年の平和博覧会の開催で道幅を広くするため移植したりしたので、すっかり駄目になってしまった。今の公園広場の前には、当時としては新しい建築様式の分離派の正門が建てられ、博物館前にかけて各種の博覧会場が開設されて、公園は減茶苦茶になり昔日の面影は失われてしまった。そして大正12年の東京大震災である。公園の入口近くの道は避難者の荷物で



舎校部術美術学術美京東

一杯になり、火はこの荷物を傳って山にも飛火した。学校の煉瓦造りの文庫の屋根にも、火のついたボロ布が飛んで来た。そして山の中は避難者で大困乱を来たし、美術学校の校庭や学生食堂などにも、これ等の人々が殺到した。我々有志の学生は校内の巡視警備や、避難者名簿の作製、配給物資の手傳いなど急がしい思いをした。この大困乱のため学校も授業を開始することができず、永い間休校状態であったことを思いだす。こんな大事件に遭遇したものの、美校生活はいつになっても楽しい思い出である。その當時は美術学校などを志望する者は、一般的には出来損いで変わり者として、親を初めその周囲が入学に反対したもので、今の時世とはその理解が全く異っている。そういう環境の中で自分の道を歩こうというのだから、今日の人達とは多少心構えがちがっていたように思う。現在の受験者数に較べると5～6倍位の倍率だから、大して多くもないようだが、油絵30名位日本画20名彫刻10名、図案科10名というような少数の者を、実技の成績で入学させるのだから相當にきびしい入学試験であった。入学した当初は豫備科というので、怠けたり成績が悪るいは1年になれずに退学になった。我々が在学した頃の校長は正木直彦という先生で、古美術に関する造詣があり、現在資料館に収蔵されている多くのコレクションは、この先生によって集められたものが多い。當時の教授には木彫の高村光雲先生も健在であり、塑造では朝倉文夫、北村西望、建畠大夢などの先生が描

っていたが、朝倉先生は人力車で、和服で登校された。人力車といえば、大村西崖という東洋美術の先生も、和服か中國服で、人力車を使用された。赤い玉のついた中國帽を冠り、袖口の長い中國服の腕を前で組んで、壇に立つ先生の姿は今でも脳裏にある。その講義は美辞名句の名調子で、例えば美人を評するにも「窈窕嬋娟，羞月閉花，沈魚落雁」といった形容詞が先行した。油絵の方の先生は藤島武二、岡田二郎助という巨匠も居られた。我々は芸用解剖学の創始者、久米桂一郎先生にデッサンの授業をうけた。又陶器で有名な沼田一雅先生の印象も深く、塑造の手ほどきを受けた。その他工芸の方では六角紫水、清水亀藏などの大家が在籍され、私達は島田佳矣先生に図案科の主任教授として、工芸図案の実技を指導されて5年間を過ごした。又建築の関野貞先生などの碩学にも接することができた。とに角よい時代で、伸び伸びと我々は勉強することができて、50年後の今日同級生が集っても、昔の学校生活が話題となって大賑わいである。同級生では前の美術学部長であった伊藤簾さんや、獨特の画風で知られる野間仁根があり、工芸方面では鑄金の教授であった内藤春治君を始め、同じく鑄金の香取正彦、金工の大須賀喬君、古社寺の修復で知られる森政二君なども、大正14年に卒業した仲間で、現在でも美校に在学したことを誇りとし、楽しかった学生時代に戻って時の経つのを忘れるのである。



■明治、後のオペラ歌手二浦環は当時なんと自転車通学であったとか。今でこそ、みすばらしく感じるが、当時はそれが何ともハイカラなものだったらしく人目をひいていたとか。女性のソックスが見えたと言っではさわぐ時代のことであった。

■男子一生の仕事として音楽をやるなど、一般の中では考えられなかったところ、何かにつけ、男子が不足。特に管楽器は不足し、オーケストラができない状態であった。しかし、このころ海軍軍楽隊が週何度か音校の門をくぐり、音楽理論とレッスンをうけていた。GIVE & TAKE というわけでもないだろうが、音楽学校としてオーケストラを編成する際、海軍軍楽隊が 枚加わったとの話。

■またまた、管楽器に關した話。ある者、中学で英語を学ばず、音校の入試の英語まるでその答わからず、隣をのぞき込むも、無礼にも、薄情にも、隣の女は袖でこれをかくす。これで彼、困りはて、やることもなく用紙に大きな丸を1つ書いて提出。あたりまえのごとく、彼、その年入学ならず、彼、次の年、また、音校受験を挑むに際し、中学の恩師より、「前年の様に丸だけは書くな。せめて、誠意をしめせ。」と言われ授かった言葉を守りて、答を書きしと思えど、そうではない。彼その英語能力の全力をふりしぼりて、英語の問題を写す。これ、彼の誠意なり。

この誠意が通ってか、英語は点数にならずとも、面接で、当時不足していた管楽器をやるとの約束で、入学がなったとか。音校ののんびりした時代のことである。

■当時、オペラといえば明治36年7月、グルック作「オルフェウス」の試演が奏樂堂において、卒業生、在校生で行なわれた。独唱は吉川やま、柴田 環（後の二浦環）、宮脇僊二、ピアノ伴奏にケーベル、訳詞に石倉小二郎、そして舞台美術は美術学校が受け持ったと



見えて、岡田二郎助、藤島武二の名を記録に見ることができる。

しかし、当時の文部省はオペラをやるということに、官立の教授・生徒が、白粉を塗り、衣装をつけ、河原乞食のように舞台に上るとは——という見解があり、戦後に至るまで音校では、オペラはコンサート形式、セリフをぬき、歌のみといった形のものを続けていたとか。

■食堂話いろいろあれど、大正・昭和初期と、キャッスル食堂についたてがあったそうな。それが、いったい何かというと、「男女〇歳にして席を同じうせず」ということらしい。男女共学ともいえた音校もきびしく、話が公けにできるのは演奏会や勉強についてのことぐらいであったらしい。

話によると、当時師範科の男子、声楽の女子が電車で一緒にいたところを校長に見つけられ、男子退学、女子無期停学との処分。もっとも女子の停学は2,3ヵ月でとけたとか。当時、女子には多少甘かったとも伝えられる。

●昭和初期、どうして、かなりすもう熱がさかんであって、毎年春秋に学生すもう大会があり、上野から学生横綱が出たとの話も聞く。さて学生の楽しみであり、名物であったのはその大会会場、両国国技館にこだまする応援であったらしい。毎年趣向を凝らし、ある時は、アメリカインディアン酋長の、次はピエロとさまざまであったが、このころ安永良徳応援団長扮するピエロの応援は、当時の語り草であったらしい。応援席の二階席の前にどうやってつけたのかブランコをつくり、それに乗って一階席の客のはるか頭の上で揺れながら「チャレヤレ」をガナリ、揺れがなくなり、一階席の真上で止まってしまうと、またヒモで二階席までブランコをひきよせ、これを繰り返した。

この応援に圧倒され敗戦校応援団は、その不満冷めやらず、芸大生がこん棒でなぐられるという事件までおまけについたとか。

●このころの話によく耳にした所の「チャレヤレ」は一種の美校の応援歌のようなもので、平和記念博覧会ころ、南洋より土人が来て、美校有志が、その歌、踊りを教わり、これを皆に広め、歌ったものらしく、

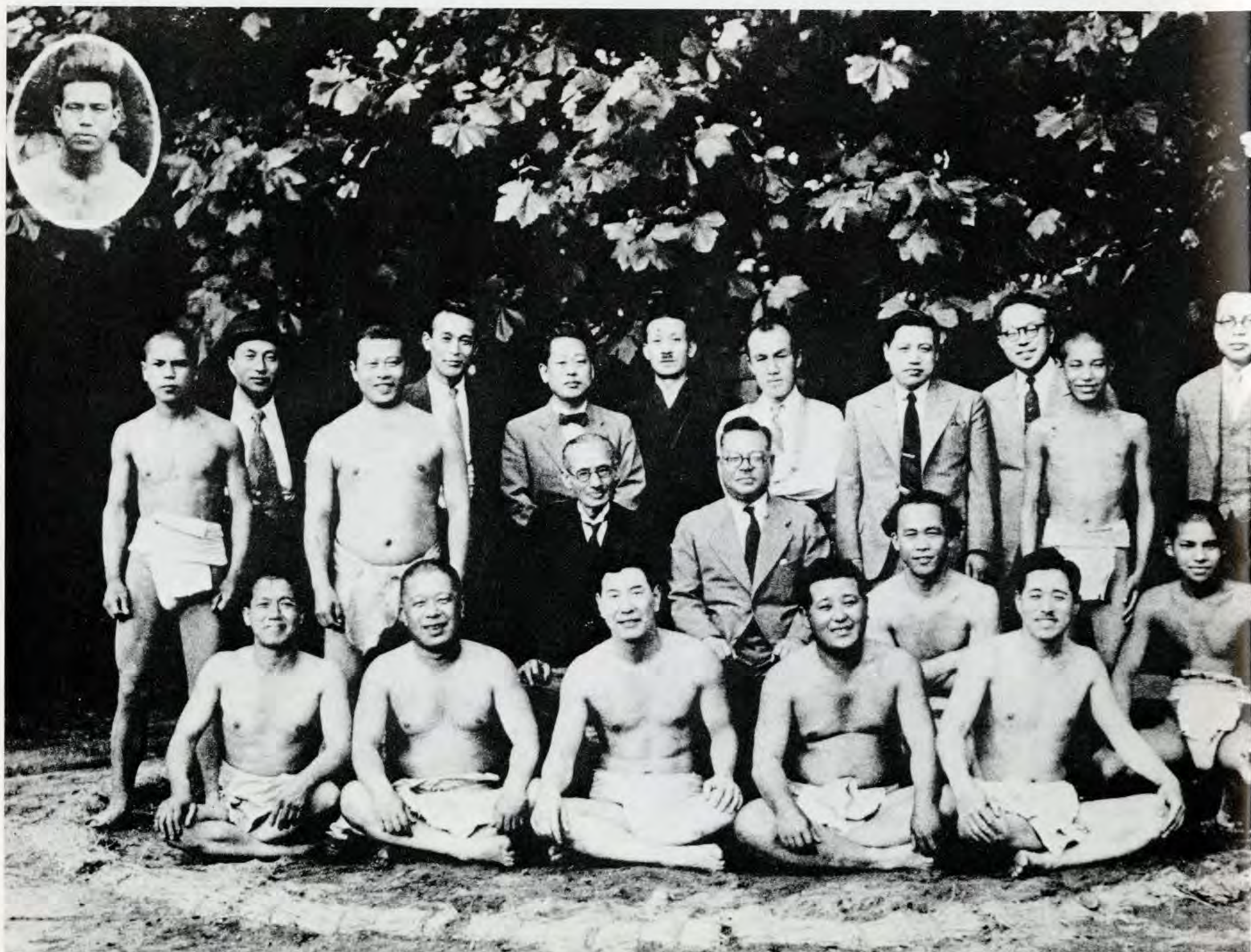
#### 芸術祭によせて

林 武(画家)

芸大生が、年に一度、秋に芸術祭を行うということは、若い時代の学生生活において、非常な喜びである。昔は、芸術祭の為に、2ヵ月も、3ヵ月もかけて、余興の準備をし、他の大学においても、さまざまな、思い思いのお祭が行なわれるが、その中でも、余興のおもしろさにおいて、芸大が、日本唯一の名物であった。芸術が直接に人間性を根ざすという点で、そこには自ずからなる若人の人間的、美術的、劇的表現があったのだった。しかし、火傷をする人だとか、いろいろな弊害が出るなどあった。時代は移り更り、生活ははげしく、そのような学徒団らの芸術祭も、非常に静粛なものになるに至った。が、その静粛さにおいて、芸術祭を、一年一度の、学生の意義ある祭とすべく、各々のアイディアを持ち寄り、大いに奮起してやられることを、切に望む。それを明日への勉学の動力としたい。

(1966年プログラムより抜粋)

昭和4年





現在の芸大生でこれを知る者はいない。横山大観時代より伝わると言われる「チャカホイ」にしても、今はやいテンポとは違い、のんびりした物であつたらしい。

## チャカホイ正調

川路柳虹／作詞  
山田耕作／作曲

- 一) 風は春風、櫻は上野  
中に美の字のあの徽章 (チャカホイ)
- 二) 青い若竹、若枝の青葉  
水に濡れれば玉が散る (チャカホイ)
- 三) 森で騒ぐは上野の鳥  
阿呆、阿呆と啼いてゐる (チャカホイ)
- 四) 何と云はりよと繪かきになる身、 【日本画】  
筆が生命の一本差し (チャカホイ)
- 五) 白いカンヴス一筆染めりゃ 【油絵】  
空は碧の日本晴れ (チャカホイ)
- 六) 土くれなんどと粗末にするな 【塑造】  
ひとつひねれば血が通ふ (チャカホイ)
- 七) 夜叉も佛も刀のままよ 【木彫】  
彫れば木屑も神になる (チャカホイ)
- 八) 粹な衣装も、金目の部屋も、 【図案】  
元はデザイン、腕を見ろ (チャカホイ)
- 九) 日がな1日タガネで暮らす 【彫金】  
金は世界の廻りもの (チャカホイ)
- 十) 奈良の大佛、ただでは出来ぬ 【鑄金】  
ふいご吹いたり金鑄たり (チャカホイ)
- 十一) ジャパンという名で知られた日本 【漆】  
漆や世界の立役者 (チャカホイ)
- 十二) 黒いボールド、線引くチョーク 【師範】  
口ちゃ描けない繪のころ (チャカホイ)

●芸大と動物園の隣あわせは今にはじまったことではない。今でこそ、金工棟などが立ちならんだが、当時はキジが鳴いたともいわれるヤブで下にはヘビが根城にしていた。当時のボイラーマンが1m半もの大物を補え、教務に報告したところ、「それは学校のものだ。はなせ。」と、言われたとか。

●大正9年校友会報1号によれば、当時の美校のクラブは、剣道、柔道、弓道、庭球(軟式)、山岳、声楽、レコード、謡曲、映画、茶道、短歌、俳句、書道、舞台芸術、写真グループなどであるが、その後、話に聞くと、乗馬、すもう、ラグビー、水泳などが加わった。もっとも、少ない人数、カケモチ部員花盛りであったころ。

●突如にしてわけのわからんことをする美校生。春先、雪が積もった朝方、雪見酒でも、やっていたのだろうが、3名がまっ裸で踊り出し、門を出たにとどまらず、なんと広小路まで下っていったとか。あわてたのが広小路のおまわりさん。即座に3名を逮捕。しかし、話を聞くと、その中の1名、検事総長の息子とか。上役に弱いのは今も昔も変わらないよって、それほど大そ

れたことにもならなかった。「どうだった」と聞くとその返事も変わって。「天井食わしてくれたよ。」ほんの春先の一談、おそまつ。

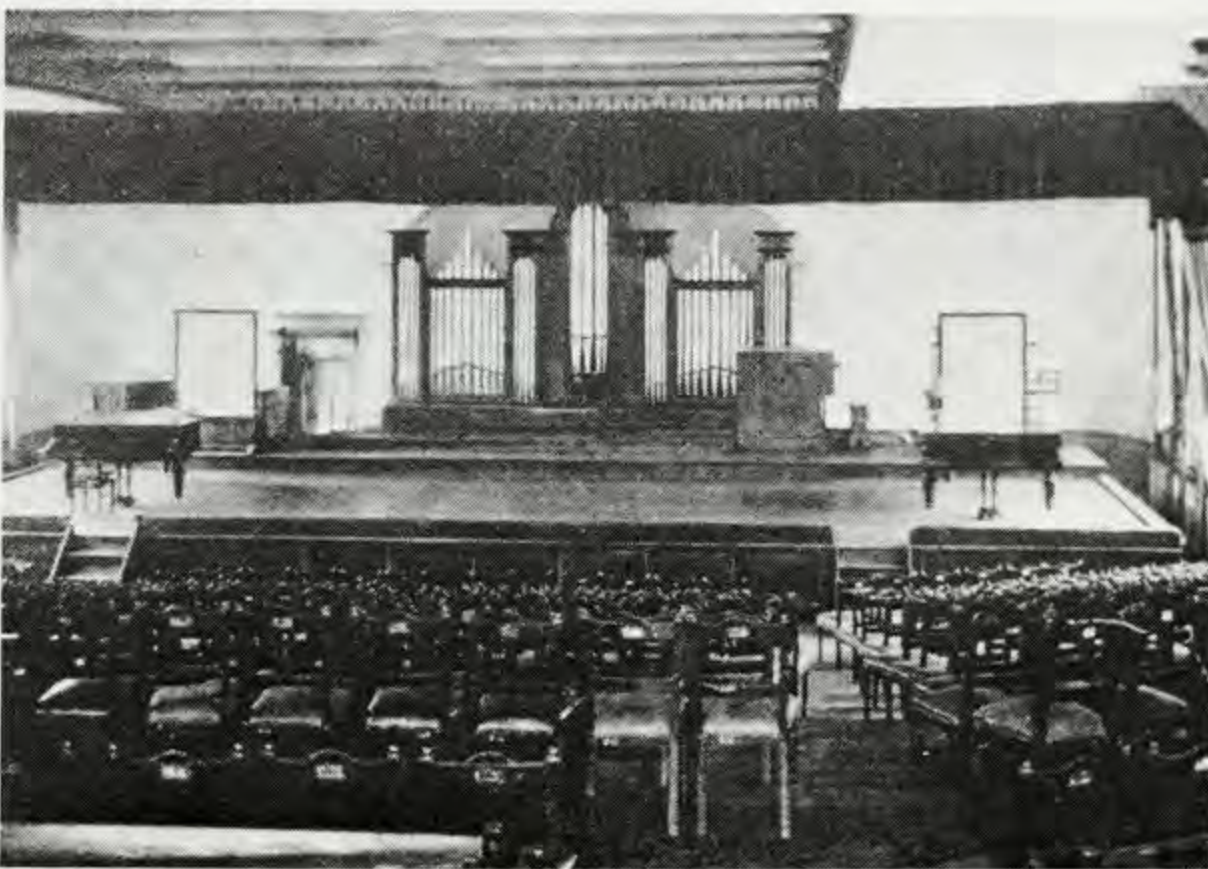
●飲むと言っても、東京にコーヒー店など、数えるほど、しかし、ビヤホールにはよく足を運んだらしい。当時ジョッキが50銭であり、いざ金がなくなると、買ってあった色紙をひっぱり出し似顔絵を描いたり、また、ある時は佐渡おけさを踊ってみせ、帽子をまわしてカンパを集めたとかで、客の酔もあつてか、またジョッキを注文するほど集まったものではあつたが、客の中に不謹慎なりと、学校に通報したらしく、これは打ち切りとはなった。教務主任曰く「学生は乞食にあらず。」

■バイトなど、あまりない時代、音校では自分の専門科目でバイトをすることを禁止されていた。

●芸大の芸術祭、その前身は美校の開学記念日における運動会、仮装行列であつて、今日野外ステージのゴゴ、エレキなるものが昭和の初期、大ダイコの名人によるタイコであり、チャカホイ、佐渡おけさであつたよって、円陣をつくり踊りまくったとか。美校生時代の人をつかまえてみたまえ、社交ダンス、阿波踊り、タンゴ、ジルバは知らずとも、佐渡おけさは知っているだろうから。

■美校の場合は運動会、さて音校は何だろう。奏楽堂において年一回学芸会まがいの物を行なっていた話を耳にした。ずっこけオペラをやり、流行歌などを歌い、劇「国定忠治」などもやったとか。しかし、さすが音校、突如として国定忠治がオペラを歌い出したとか。

●さて昭和も10年過ぎたころから、学校には、どこでも付属将校なる者が存在し、音校男子、美校生を集め、美校の狭い体操場でも軍事教練を行ない始めた。もっともそれほど軍事色の強い時でもなかったし、まだ教練服などもない時、ただでさえ人に縛られるのが嫌な芸術家タイプ、「なぜ、こんなことを。」という意識も強く、教練に袴やゲタで来たり、銃を逆にもったり、「ふせ！」で、下にむしろを敷いたり、無言の抵抗があつたとか。しかし校内に銃器室が見られるように銃をもち、丁度今の金工棟あたりで、木の弾がとぶ狭窄射撃なども行なっていたとか。



奏楽堂(昭和初年)

■現在、奏楽堂に入つて、ステージのうしろに並ぶパイプを何かと思う者も多かろう。これは、初め、麻布飯倉の徳川頼貞氏邸内南葵楽堂に据えつけられていたもので、昭和3年9月東京音楽学校に奇贈されたもので、当時工事費を含め、価格約7万円也。当時日本でただ1つのパイプオルガンだったのこと。

●戦局も著しくなれば、芸術どころではない。そのころの話、ある画家が抽象画を描いている所、憲兵隊が来て、その絵を見るのに何が何やらわからない。画家に説明を求めても、説明のしようがないという。苦しまぎれの憲兵曰く、絵の一部をさし、「この赤は何を意味してるんだ?」

## T教官(談)

世界でも類をみない音楽と美術の2つの異なった芸術をとりまとめた学校として、東京芸術大学が発促して23年近くなる。建物にしても、私が在籍していた美術学校末期とは、そのほとんどが変容してしまっていて、現在、大学本部、正木記念館、陳列館、守衛室、そして、今年7月に復元が完成した前美術学部本館の玄関が、今、その面影をかすかに伝えているだけで、現在、オフィウスを思わせるような鉄筋8階の絵画棟や、近代設備完備の工場のような彫刻棟、そして今、大がかりな工事中の美術学部本館を見るにつけ、時の移り変りには目を見はるばかりである。

私の頃は物が不足していた時代で、絵画も、キャンバスも不足し、モデルが来ても、暖房がないような有様で、木炭紙は前の年の入学試験の古紙などをひっぱり出しては使用した思い出がある。

当時の学生は何年もの浪人組が多かったせいであろうか、皆、ある意味でおとなであつた。飲んでではたらめも多くやったが、それは1つの自己陶醉であつたように思う。

当時、学生は工芸・美術をあわせても百人たらずで、教授と学生数が近かったせいもあり、両者は研究者として同列で、もっと近い位置にいたと思う。学校の方針としては、いうなれば天才教育、放任主義で、今日の学生はともすると教わろうとする気が強いが当時は、各人の行動が自主的で、その反面、やる者とやらない者の差がかなりあつたようにも思える。もともと美術教育では各人の才能のみはどのようなもなく、できることは各人のもった才能をいかにひき出すかということで、形式的なカリキュラムをこなしたからといって芸術家になれるものでもなく、それは教える側がいくら力んでもしかたがないことなのである。

正木記念館の横、切りとられたような本館玄関や少なくなった芸大の緑を見るにつけ、当時のデカダンでエゴイストではあるが反面、自分にきびしいような連中が集まっていた——なにか校内に入るとまわりの社会とは一風変わった世界というものを感じた——そんな校風、外の風と違った風がもう一度芸大に吹かないかと思うのである。



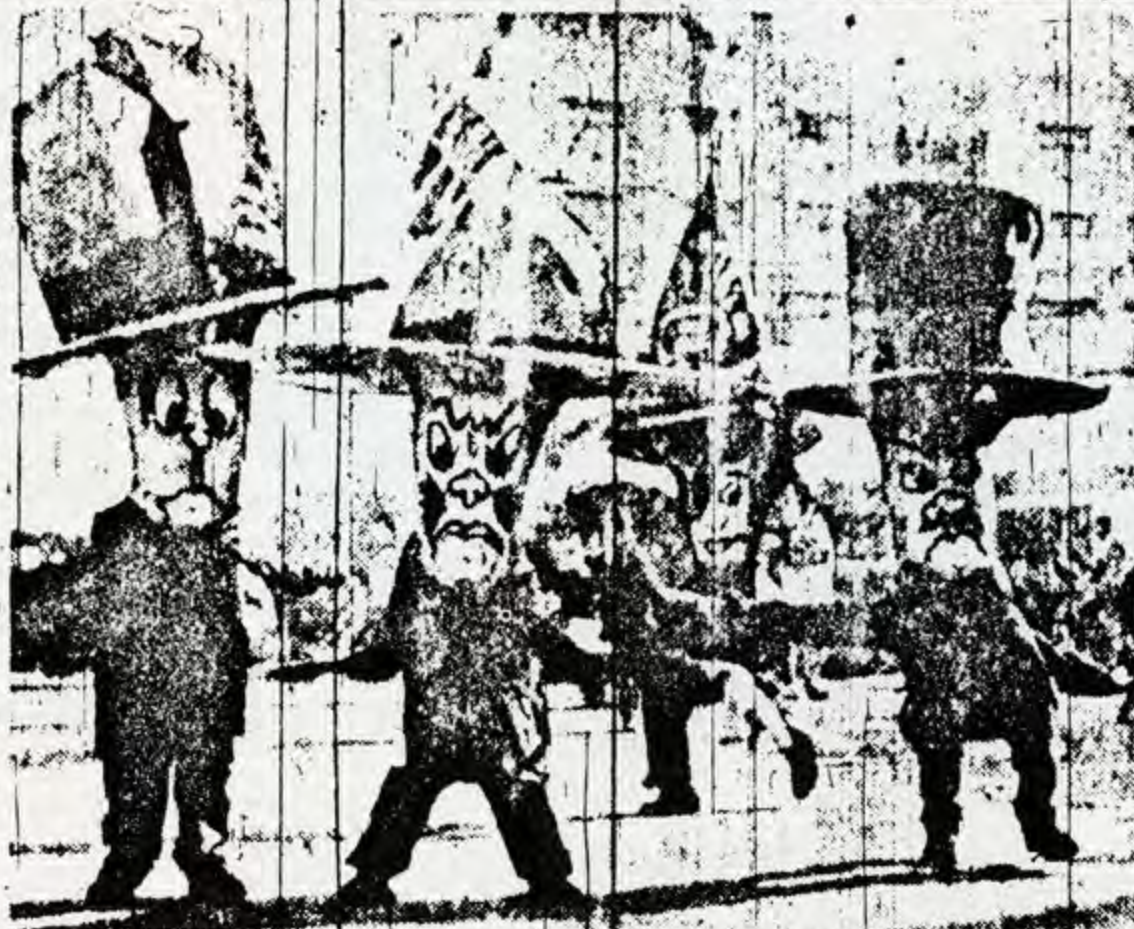
五大都市は獨立へ

更に要求貫徹へ

敬全聯廿日迄に具體策

上野美術学校假装行列隊は女を  
まじへて二百五十名が、十一日  
午前十時半、上野をふり出しに  
神田、日本橋、銀座を練り歩い  
た。一頭の駿馬にまたがった騎  
士の露拂ひに「美と愛するてふ  
乙女等よ、この姿をなんと想  
ふ」とのフラカードをかつがせ  
ロダンの天使等を護衛に仕立て  
るなど各科生が突飛な着想を競  
つてものした動く珍藝術は果然  
街に「爆笑旋風」を巻き起した  
列  
写真係は昭和通り漫行の假装行

五百圓の

[illegible][illegible]

を照した

爆笑をまく行列

[illegible]

中等校并附以  
教科書出來

「書いてある中から」

# 交通安全と犯防

來用

文部省出版 講義錄を出す

成人教育へ計畫六つ

[illegible]

內閣收進

【ロンドン、二月廿一日】

名の下  
三才制  
禁止案提出か

米各界農業防止に

●昭和21年11月13日。戦争がおわってまだ物が不足し、人々は暗い日々を送り、上野の地下道などは浮浪者の寝る場所であった。戦前のあの仮装行列を復活させよとの声が学生の間よりおこり、学生はもちろん、教授、卒業生なども趣向を凝らし、衣装を貸りてきては仮装をした。ある者は寺で袈裟を借りたのはいいのだが、いざ返す段になり、貸した寺の方が驚いた。それは絵具だらけで使い物にならないほどだったとか。

とにかく、そのコースは現在のように交通規制が厳しかったわけでない、広小路 須田町 日本橋 高島屋 八重州口まで練り歩いた。楽しみにも飢えていた人々が道の両わきを埋め、進駐軍は写真機でこれを写していた。(掲載した新聞は毎日新聞昭和21年11月14日2面——当時1日に新聞は朝刊2面のみであった。)

●戦前より美校の仮装のうまいのは有名であるが、ある時、囚人と警官の仮装をして練り歩いている中に、囚人を追っていた本物の警官がまぎれ込み、仮装した囚人と警官が手に手をとって逃げまわる珍事が起ったとか。



21年仮装行列風景 須田町通りにて





邪鬼 内藤春始（名誉教授）巫女 鈴木信一（現鑄金教授）

## 芸術祭監觴考

西大由（鑄金教授）

昔々、私が若い頃、"よく学び、よく遊べ"という言葉があった。

私自身よく学んだわけではないが、昭和16年美術学校に入学してから遊んでばかりいるうちに直接生産に役に立たないと時の政府によって判断された私達はただちに兵役につかねばならなかった。

それが昭和18年12月の学徒出陣と称するものである。

生れた日から皇国の為に——と教えこまれて産った人間であるから"俺が行かなければ"と勇み勇んで入隊したといっても、それを責められる人はいないだろう。

しかし戦争は負けた。

私達が考えねばならなかったのはその日からである。すべての人は腑抜けの様になり、皇国のために死ぬといった人達はすべて口を噤んで俺はそんなことは言わなかったという様な顔をした。九州の田舎で新しい村づくりをしようなどと白樺派の様なことを考えて煩悶

したのもその頃だ。

すべてに失敗し絶望して、どこか遠くに逃げ出すところはないかと考えた時、残っていたのは、未だ棄権していなかった学籍であった。

上野の杜は住みよいところで浮浪者でさえ集ってその住家とした。

学校に帰っては来たものの目的もなにもなく、毎日、毎日をいかにしてスイトンを食べるかということのみに追われていた。

このあたりでパッと、とにかく体中に溢れている若いエネルギーを発散させねば鼻血が山その様な気持ちに皆んななった。

素裸で狂った様に暴れまわろうということで、昭和21年の秋に美術学校芸術祭が行なわれた。先生も卒業生もみんな同じ気持ちだった。久しぶりに集った連中の合言葉は"生きていたのか?"ということであった。

それは嵐の様に過ぎて、その明けた日は身も心も

台風一過の晴天であった。大きな張子の太仏を引っばって八重州口までデモをした日は聖武天皇の気持ちがよくわかる様な気さえした。

翌日の新聞は写真入り"くにの親父の顔みたせ"という見出しでデカデカと報道した。私達はそれで単純にも結構、溜飲を下げたりもした。

すべてが遠くなり、今私は毎年の芸術祭を見て、今昔の感に耐えない。

自宅から来るものは勿論下宿や外食の連中までが当時貴重品だった米を1日分づつ持ちよって先生の指導？でその日の為に濁酒をつくり、大盡振る舞いをしてたのしんだ昔日に比べ、今や基地の飲食街を思はせる模擬店の大繁盛。同慶至極というわけにはいかぬ。故に思う。

これでよいのだろうか——と。

世の中のことは関係なく悠久の真理に向って私達は本当に今、歩いているのだろうか。





## 美校売店今昔

建築科助教授 前野 崑

美術学校に売店が出来たのは、いつの頃なのかよくわからない。私の学生時代には丁度絵画棟新館の石膏室には、あたりに大浦食堂があった。絵画棟の出入口あたりに赤レンガ造の建築科の建物があり、その南裏側に便所があり、そのまた裏の陰気な建物だった。その建物は、大正2年に出来た生徒食堂で、どうやら今日いう学生ホールであったらしい。

生徒食堂には卓球台が2台と、居酒屋風のベンチに机が数ヶ並び、異様な風態の学生がたむろしていたらしい。生徒食堂の南側に厨房、パン室、K Iという洋服屋と靴屋の4店舗が居を構え、画材屋は食堂の外に美蘭社と昭美堂の2軒があったようだ。

食堂はお義理にもきれいだとは云えたものではなく、中でもパン屋のオヤジは体が弱く、喀血の体でパンにジャムを塗っていたという。今日では考えられないようなノンキな話だ。ところが、当時の学生にとっては、いい絵の種であったらしく、橋本八百二氏は、ここの靴屋を描き、展覧会に出品して賞をもらったとかいう噂もある。

当時の食堂のメニューは4品目程で、値段はランチ40銭、

カレーライス25銭、今と比較すると $\frac{1}{200} \sim \frac{1}{300}$ になる。しかし、当時の学生の中には、この昼めしも欠食し、数人で組んで欠食して残した銭を出し合っては1円20銭のモデル代を捻出していた苦学生も多かったという。

この食堂に大浦英一一家が移り住んだのは、昭和12年2月24日、丁度今の食堂の所にあった梅林が満開でとてもきれいだっただろう。時に大浦のオバサンは20代、丸まげを結った丸ポチャの美人だった由。主人の大浦英一だんなは、夫人とは対照的なヤセギス、もと京橋魚豊の若衆で、無口な人だが、仲々学生の面倒見が良い人だ。

このヤセギス氏と、丸ポチャ美人のコンビは、数々のアイディアや逸話をこの食堂を通じて生み出していった。マカロ煮、あいの子ライス、豆腐バタヤキなど和洋チャンポン下町風といったところである。

また、戦前の美校育ち、不良老年どもの気憶によると、漬物はタダでカウンタに山盛りになっていた由。文なし学生はメシとタダの漬物でお茶漬けにして、餓えをしのいでいたという。白菜1ヶ200円もする当世では望むことも出来ない。実は八百屋が店のあまり物を、「美校の奴なら腐り物でもあたるめえ」とホイホイ置いていった物の中から、丸ポチャ美人が、痛んでいるところをとって、1夜漬けを

作り、「まあ、たべな」と出していたもので、元が元だから銭をとる訳には参らぬとタダにしていたのだそうだ。

昭和20年から25年頃にかけての戦後のドサクサ時代には、このオヤジと学生をめぐる伝説は多い。当時は大変な住宅難で、戦場から帰った復員学生も住む家がなく、乞食の風態でノラネコの如く学校に住みついた時代である。酒を飲みたくとも酒はなく、やっとのことで手に入れた酒も、巢に持ち帰ればたちまち空にされてしまう。そこで大浦のオヤジにそっと預けておけば一安心。時には「オジサン1杯ヤロヨ」ということにもなる。また、「牛なべ作ったから食べに来い」と学生に誘はれ、出かけて見るとす汚れた洗面器をナベ代りにした牛なべで、これには閉口したそうだ。ところがそんな学生が風呂屋に出かける時にはナベを下げてゆくそうだ。

音校のキャッスルに美校のヤカラが食べにゆくようになりだしたのは、勿論戦後のこと、音校の美人見たさに美校生がキャッスルに通い、音校の美人どもはラグビー部の汗臭い、いかつい野郎ども目当てにやって来たようだ。食堂のとりもつ縁で成立したカップルも少なくない。食堂は大学のもつ研究と教育機能以外の、若者のつきあいの場として、今日有効に働いている。





画材屋はこれとはまた違った働きをしていた。私設学生部といったところだ。美蘭社のオカミのところでは、オカミを肴に恋愛論やら人生相談を持ち込む学生で賑い、昭美堂のオヤジのところは、教室で聞けないような画材の話や借金相談などで賑っていた。

昭和39年の東京オリンピックの後、日本をおそった不況の嵐は、学生達には直接学資不足として現はれた。中には実家が倒産し、支送りが途絶える者もあり、飯代稼ぎに毎日働かねばならない学生が現はれ始めた時勢であった。そうした状況の中で、43年の学生大会が開かれ、安い飯を食いたいという学生の声を反映して、自治会の運動方針に生協設立を盛り込むことになった。

その頃、音楽の学友会とキャッスルとの間に、キャッスル名物であるレモン水の値上げをめぐる、激しいレモン戦争が起った。レモン戦争は旧価格のものをおくことで和解が成立したようだ。

43年6月から油絵の北原、建築の齊藤の両君が中心になって、先づは食ってゆけない学生のために、食堂改善委員会を組織して精力的に調査活動を始めた。この調査の結果、大浦食堂の価格が他の生協と比較して決して高くない、むしろ正当化する答えが出る一幕もあった。これは、故大浦

英一氏とその夫人にとって名誉なことだった。

本格的な生協設立の動きは、同年の夏休み明けと共に始った。穏便とルル主義を取りたがる大学に対し、学生は慣れない法律文書を勉強し、挑戦と応酬が交された。43年も暮れようとしている頃、大学側も生協設立に協力する方向に転じ、文部省との連絡や、学内予算のやりくり、施設の用意など、積極的に援助をしてくれた。中でも、会計課の木下課長は元組合執行委員の経験を生かして、大変な活躍をして下すった。

この間、既設の業者との営業譲渡の交渉が続けられたが、美校・芸大の歴史の中で培かれた大浦食堂を始めとする業者と学生との人間関係の深さについて、改めて考えさせられる事があった。今の教官の中にも学生の中にも、大浦家や画翠のオヤジ、音校では大関のオバサン、キャッスルの世話を受けていた者が少なくなく、そうした連中の中から「大浦のオバサンを救う会」、音校では「大関のオバサンを救う会」を作ろうとする動きがあった。何となくトゲトゲする損得感情の強い世の中で、一抹の救いを得た感があった。生協運動を推めている者にとってもこれら「オバサンを救う会」の心情が分る丈にその苦しみは大きかったに違いない。

思いつくまゝ

遠藤雅古 指揮科講師

早いもので、もうふた昔前の事になって了ったけれども、丁度芸大受験のころ、国電の中で見かけた前の座席の女子学生の襟えにあった“楽”のバッジを見て、自分もきっと思ったことがついこの前の様な気がします。今のアカンサスのバッジも良いが、以前の“美”“楽”のシンプルさは素晴らしいものでした。学部の表示として併用してもと思うのは懐古趣味でしょうか。

日制から芸大への移行期に入学した我々は、戦後間もないせいもあって最年長のTさんは33才、平均年令24・5才した。昔の音校の門を入ると先ず当時の名物男であった“カンザキ”さんと云う守衛さんに気合をかけられ校舎に向ったものでした。その頃の雰囲気は僅か乍ら奏楽堂の周囲に残っては居ますが正面左右のボッタリした大きな八重櫻、その下に今でもあるベトヴェンの胸像の前で皆でよく写真を撮ったものでした。(その頃は白黒しかなかった。)又大きな枇杷の木に一杯実のついと時の彩りもなつかしいものです。扱て教室に入ると、防音壁なんて洒落たもの等はないから、自分で音を出している時は廻りの音は、まあ気にせずに居られてもちょっと手を休めると周囲の他人の音が奔流の様になだれ込んで来たものでした。これが今考えると夏は暖房完備、冬は冷房完備と云った状態ではあったけれども適度な刺激になっていたことは否めないことだと思います。学生数は少なかったけれど教室数も少なく、ピアノの好き嫌いもあって、部屋のとりあいも相当なもので、10分あけると他人にとられて了うと云った不文律がありました。夏は緑が多かったからまだしも、冬はレッスンのときだけ火鉢が入るだけでしたから、手袋の指先を切りとって猛練習していたEさん、毎日狸の毛皮を脊中にバイオリンを弾いていたOさん。果ては1つの練習室を朝から陳取って卒業迄に新品のピアノを1台弾きつぶして了ったMさん等、時に触れて目に浮かびます。その頃は各科に分れていなかったし、何んとか季節によって出来る溜り場に於ての善悪？入り乱れての雑談が1つのエネルギー源になっていた様な気がします。

芸術祭と云えば、演奏、展示中心から模擬店へと規模が大きくなって来たのは物質が豊かになって来た頃からと思いますが、我々クラスでやった来々亭満腹軒と云うラーメン屋にどは、その走りの気がしますが、スプ<sup>ドンツ</sup>採りの豚骨のバケツを1晩の中にひっくり返されたり、見当らなかつた黒板消しがスプの鍋底から出てきたり(時効???)その後1ヶ月位ラーメンの臭いの中でシェーマンを歌ってレッスンを受けるのも味なものでした。

今では皆な若々しく自由な服装で華やかですが、物質不足のせいかな“上野の鳥と云われた黒装束も又”かっこいいものでしたよ。



●戦後食料難、油絵のモチーフと言っても何があるわけでもない。ないないづくしで、中身の入った芋俵をひっぱり出しモチーフとした。その芋俵、日がたつにつれ、形を変え、しまいに中の芋はすっからかんとか。

●また、スズメも食料難。教室内、デッサンパンのパンくずでも教室の中にスズメが入ってくる。そこで飢えた美校生、窓をしめ、これを追いまわす。この時代、スズメにとっても、いい時代ではなかったよである。

●芸大と上野動物園との話、教々あれど、今でも残り語り続けられている一つ。戦後もかなり立つまで、その境がはっきりせず、芸大の敷地が上にあるということで、土手を越えさえすれば、そこは動物園であった。いわば、フリーパス。

しかし、工芸図案科のU君、いつものように動物園に入るに人が1人もいない。かといって定休日でもない。実はその日皇室のてるの宮様とかが、動物園見学の予定で、一般見学者の入場は許可されていない。これがU君園内をブラブラしているのを係員にしかられ、もともと薄い、芸大の信用がおちたとか。

今、私達が動物園に入るには教務で身分証をひきかえに「都営施設無料入場券」で入ることになっている。

○さて昭和もついに47年。去年の芸術祭企画委員会が、マスコミに葉書を出したせいもあり、当日多かったマスコミに気付かれた人も多かろうが、芸大の模擬店や余興に目をつけたのがNET。しかも、どういったわけか、「アフタヌーンショー」

後日、大浦食堂の前、九時ごろ集合し、その場で引き込んだ人数もあり、総数340名バスに乗り込んだ。さて放送局側もなんとか芸大生をのせようと、酒、ビールを用意してある。各人、もっあとにひけぬ思いで飲み出した。

さてこの頃、芸大ではというと、その出演を知った連中が、男子は用務員室、女子は女子寮と集まり、この出演を今や遅しと待ちわびていた。

番組が30分ぐらいして、いざ出番、そのタイトルも、びっくり「クレジー芸大行進」とかなんとか。それも、皆かなり酒もまわっていたし、予定のストリップ(男の)もインド音楽も中途半端。酒に酔った学生に司会者曰く「近ごろの学生さんは、こっまでなるのかねえ。」酒を飲ませ、のせるだけのせといて、それはないの声。

とにかく、これは悪評で、芸大やNETに非難の電話があったとか、その時のプロデューサーがおろされたとか聞く。何にしても後の祭の色が濃い。

○日本中の注目がこれほど上野の山に集まったことはあるまい。徹夜組もあったとかで、人々は列をなし、上野駅までえんえんと続き、その最後尾を捜すのも苦労であった。日本中のマスコミは上野の山に集中し、ニュースのみではあきたらず、実況放送まで行なう局もあったほど。これが、芸大の卒制や、定期演奏会の風景かと思う人は芸大をかいかぶっている。何を隠そう、これは昭和47年11月5日、パンダ一般公開初日の風景。拝観料百円を払い、1時間以上も待ち、拝観時間は2分足らずとか。そんな列の中で頭の上の方、動物園の柵の向うで窓から身をのり出し、パンダを悠々と見ていた連中が目に入った方も多いことだろう。これは芸大鍔金教室より、パンダが見えることを1はやく発見、または聞きつけた。早耳組の連中である。この集団が長い列の待つ人には非常に気になったと見えて、当日のテレビや、その週の週刊誌などにも、この風景が紹介された。(写真は「週刊読売」11月18日号より)

## らくがき又は失われた今日

泉 真也(デザイン評論家)

最近の学校や、学生のことは、よく知らない。かわったといわれるが、学生はいつでも「この頃の学生は——」といわれるものだ。私達のころも、そうだった。私は昭和30年にこの学校を卒業した。10年ひと昔というからには、私にも昔をいう権利がありそうだ。

私がこの学校に入ったのは、いわばひと目惚れというやつで、たまたま前を通りかかって、ふらふらと学内に入り、ふと入る気になった。それまでは芸大なんかどこにあるかも知らなかった。なぜ不意に入る気になったかという、第1に素晴らしい落書きに惚れたからである。今はもうなくなってしまうが、その落書きは、本館をはじめ、壁のいたるところにあった。半数以上がヌードで、等身大のものもよくあった。たいていは、酒を飲んだ勢で書くので、筆の伸びがすごくいい、実に見事である。それに絵にかけては相当なテングが集まっているので、人前で大きな落書きをするには、かなりの自信が必要だ。芸術家というやつは、ある意味では、すごく自意識過剰だから、そんなときにも人目を意識しているとみえて、書くやつは自他共に許すやつであったせいだろう。伸びやかな実に鮮やかなものだった。あれがなくなったのは残念でたまらない。自分の青春が、ふきけされたような感じである。それに奇妙に感動したのである。

それと石膏室、世の中に、こんな素晴らしい部屋があるのかと思った。ただむしうにここで生活してみたかった。そんなわけだから、学校に入っても、時間通りに来たのは、

入学式と卒業式だけで、あとは11時ごろ現われては、真直ぐに食堂に行き、腹ごしらえをしてから、午後はもっぱら、野球とピンポンで過した。芸術学科の上原先生あたりから「君は東京芸術野球大学ですか」などといわれながら、野球にはげみ、疲れると草の上に寝ころんで講義に出かけて行く先生を薄目をあけて見ていた。それでも学校に来ていだけで、不思議と腕が上がり、何ヵ月かたってデッサンなど出してみると、よくなっているのが、はっきりわかった。あれがほんとうの伝統というものの力なのだろう。学校ものんびりしたものだった。デッサンをしている中に、モデルと出来ちゃって、そうすると他のやつは、つまらないから、数人でデッサンしていても、1人去り2人去りで2人だけになってしまう。自然のおもむくところ、ますます出来ちゃって、結果は子供が生まれた。奥さんはダンナに子供をあづけてモデル台に立ち、ダンナは子供をおんぶして、奥さんを描くというような豪傑がいた。何しろ奥さんに食べさせてもらっているのだから、仕方がない。学課のときは、うるさいので奥さんがあずかっている。実に尊敬すべき人物で、私達は何となく胸にあたたかいものがあるのを覚えながら、彼を見ていたものだった。子供をおんぶしながら、野球をしていたこともあった。バックボックスに立つと、ライトを守っている彼が見えたものだ。

授業中に「オイ、パチンコに行こう——」などと教室の外から声がかかると、「オ」といいながら4・5人が立つ。先生は平然として講義を続けている。「あたしも学生のころ、ああでしたよ」と先生はニコヤカだった。そんなとき、オレはいい学校に入ったなあ、しみじみ思うのだった。

それに音楽学部には、メッポ きれいな女の子がいて、

その中に、学校に来ると、真先に音楽学部の方に行き、彼女の出欠を確かめてからでないと、落着いて野球も出来なくなった。授業などは、もちろん出来ない。先生の方も心得ていて、陶器の浅野先生などは「オイ、泉君。彼女さっき来たよ。行ってこいよ」と言われすっ飛んで行くような日が続いた。いわば、めちゃくちゃな学生生活だった。遊んでばかりいたようだが、事実だから仕方がない。今年も芸術祭が来た。こんな生活を許してくれた芸大を、私はなつかしむ気持ちでいっぱいだ。あれが青春というものだったのだろう。学生生活ではなくて、当時の芸大には生活のすべてがあった。私には、何も誇るものがないが、こんな母校をもっていることが、たった一つの誇りである。私は2つの大きなことを学んだ。1つは自分にうそをつかないでも生きて行ける世界があるということ、もう1つは、人間の才能には、やはり出来、不出来があって、優れた才能には素直に頭を下げなければならないということである。それは私はルーズだったから、本やお金や傘を、よく机の上に置きっぱなしにしていた。何日そのままにしておいても、なくなったことは、ついぞなかった。誰かが無断で持って行っても必ずかえって来た。私は古いことをいいすぎたかもしれない。けれども、もしあなたがずいぶんひどいものだったんだと思うならば、学校が鉄筋コンクリートになり、見かけが立派になったとしても、人が生きて行くに必要な、芸術家が生まれるに必要な、何かが失なわれてしまったのじゃないかと思う。そうでなければ幸いである。私はながながと古い思い出を語ったのではない。今日必要なものについて語ったつもりだ。考えてほしい。(1966年プログラムより抜粋)





こちらは上野動物園隣の「見見席」。東京芸大美術科の教室から「バンド歓迎」の垂れ幕が下がり 双眼鏡を持ち出した女子学生など みんなニコニコ。

さてさて芸大雑談集、めぐりめぐりて、行きつく所はどこにあるのか。それはそれ、何でもなし。ここに芸大があって芸大生がいる。ただ、それだけでいいような気がする。今は今なのだし、昔とはまるで違ってしまっている。しかし、その昔にも、「近ごろの若いモンは」といわれる者達がいた。そして今と同じように、悩み、苦しみ、酒をのみ、馬鹿をした。それは時代の差こそあれ、仲間なのではないか。同じような若者が、時代の差、社会の差こそあれ、生きていた。馬鹿をした。その話は、ともすると消え去ってしまう。そんな中で、あまりの馬鹿らしさに記録さえしなかった物を残そうと考える「近ごろの若いモン」が1人ぐらい居ても、おかしくはないのではないか。

おわりに、幾多の資料や話をお聞かせ願った芸大の先輩諸氏にお礼と、紙面の都合と、時間の都合をもって、話の内容に突っ込みが足らなかったことをお詫び申し上げます。(完)

377.9  
9  
19

## 後記

デザインは、はかない物です。ある依頼主があり、それにそって制作し、使用し終ると惜しげもなく捨てられます。このプログラムにしても3日だけの命、あとは当時を忍ぶ時引き出されるぐらいで何の存在価値もございません。いや3日の命にしても、芸大の芸術祭を知らない人にとってはチリ紙以下の物のようです。チリ紙交換のオニイサンも新聞紙10枚の価値に見てくれます。なのになぜ、一夏もかけて労力をかけたんですかねえ。それは昔も今も変わらない。いわば、デザイン馬鹿が毎年出てきて絶える事を知らないということだろうか。そして、来年も再来年も。

委員長 山県敬子

副委員長 指田竹房 プログラム責任者 間宮健一

会計 上村晴子 富田洋美

展示 薬本武則 ポスター責任者 野尻耕作

演奏 草野裕子 吉田泰史

映画 原 尚 柳沢光一

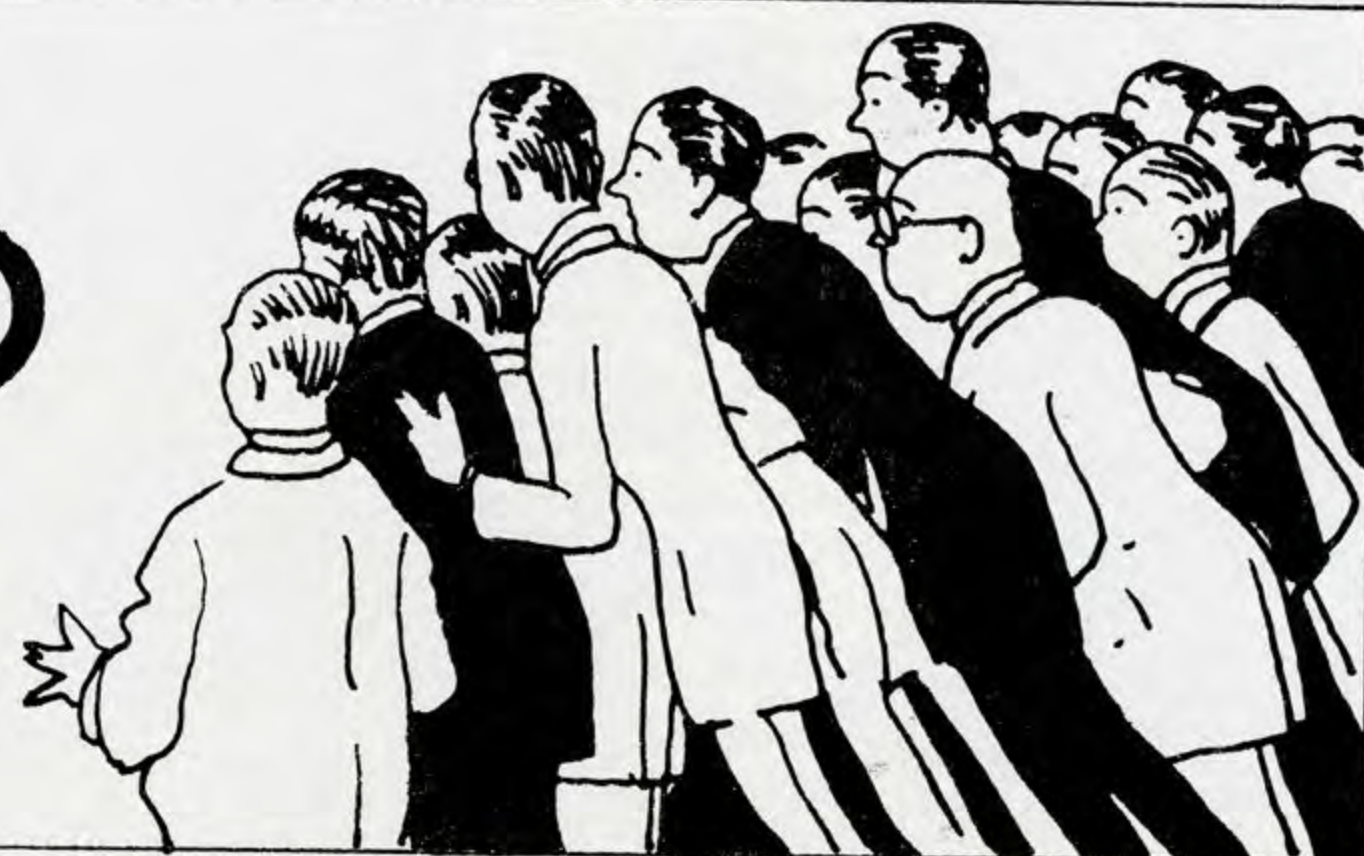
野外ステージ 渡辺俊治 林 政夫

印刷・光村印刷



UNIV.  
CO-OP

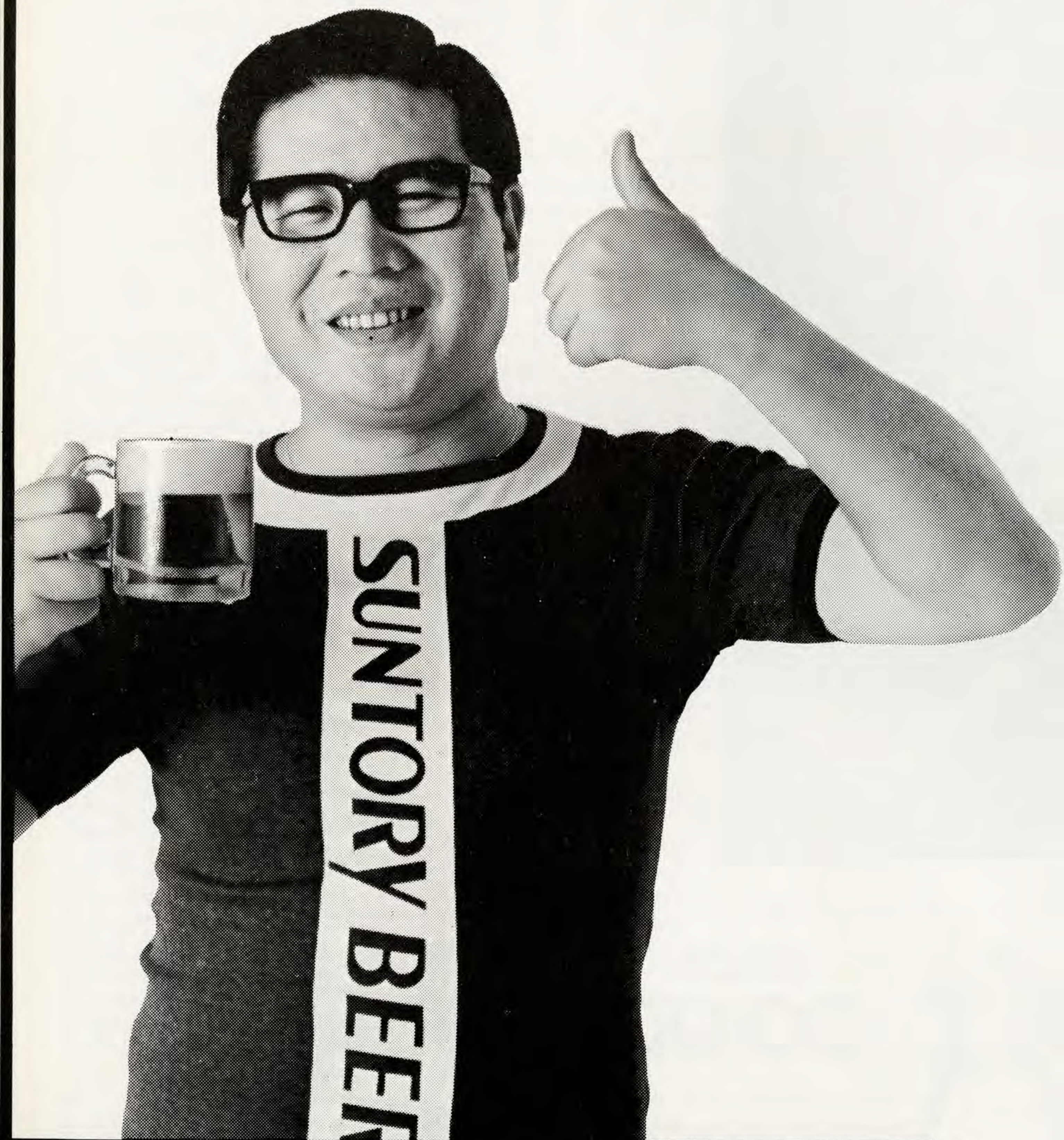
芸大生活協同組合





べし新地ビールは？

サントリービール  純生<sup>®</sup>



さすが、わかってらっしゃる。



● 最高の仕事に最高の絵具……………● 不変色 ● ブリードしない

# ターナー <デザインガッシュ>



明日の色をつくる……

ターナー 色彩株式会社

本社 大阪市東淀川区三津屋北通4-47 TEL (06)308 1212 ㊟532  
東京営業所 東京都豊島区南長崎 6 1 3 TEL (03)953 5161 ㊟171



